平安京左京四条三坊十五町
烏丸御池遺跡

―御射山町の調査―

２０１５年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市中京区東洞院通六角下る御射山町273において、野村不動産株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は野村不動産株式会社より委託を受けた古代文化調査会の小松武彦が担当した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は小松武彦がおこなった。

5．図面及び遺構・遺物の整理、遺構の製図は小松がおこない、遺物の実測は板谷桃代、水谷明子が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。記載した数値はm単位で、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）である。

7．本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1（京都東北部）、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（壬生・三条大橋）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺物番号は実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈　安藤哲郎　家原圭太　伊賀哲平　植村まどか　馬瀬智光　岡山耕平　奥井智子
織田大樹　梶川敏夫　神田周作　北田栄造　橘田宗勝　熊井亮介　熊谷舞子
サグラリオ・バジャダレス（ニカラグア自治大学）　田中洸一郎　坪田剛　鈴木久史
長久保千馬　西森正晃　西山良平　新田和央　長谷川行孝　平野哲也　藤原武士
堀　大輔　前田義明　松崎大介　水野克明　宮原健吾　脇野　順
(株)明輝建設　(株)礎　(株)大高建設　(公財)京都市埋蔵文化財研究所
(株)京都遺跡調査会　(株)シン・コーポレーション　西武建設(株)　野村不動産(株)

本　文　目　次

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査経過……1
（1）調査に至る経緯……1
（2）調査の経過……3
Ⅱ　遺　　構……4
（1）遺構の概要……4
（2）基本層序……4
（3）遺　　構……4
Ⅲ　遺　　物……14
（1）遺物の概要……14
（2）土　　器……14
（3）瓦　　類……21
（4）銭　　貨……23
（5）土 製 品……23
Ⅳ　ま と め……24

図　版　目　次

図版1　遺跡　第1面遺構実測図
図版2　遺跡　第2面遺構実測図
図版3　遺跡　第3面遺構実測図
図版4　遺跡　第4面遺構実測図
図版5　遺跡　第5面遺構実測図
図版6　遺跡　第6面遺構実測図
図版7　遺跡　1　1区第1面全景（西から）
　　2　1区第2面全景（西から）
図版8　遺跡　1　1区第3面全景（西から）
　　2　2区第3面全景（西から）
図版9　遺跡　1　1区第4面全景（北から）
　　2　2区第4面全景（西から）

図版10　遺跡　1　1区第5面全景（西から）
2　2区第5面全景（北から）
図版11　遺跡　1　1区第6面全景（西から）
2　2区第6面全景（西から）
図版12　遺跡　1　礎石建物1（西から）　2　井戸164（北から）
3　井戸80（北から）　4　石列4（西から）
図版13　遺跡　1　溝130（北から）　2　溝130断面（路面セクション）（北から）
3　溝134（北から）　4　柱穴143・146（西から）
5　ピット列1・2（北から）　6　溝149（北から）
図版14　遺物　溝149・土壙179・溝181・第6面掘下げ・溝141・第4面掘下げ・第3面掘下げ出土遺物
図版15　遺物　第2面掘下げ・第1面掘下げ・土壙4・第3面掘下げ・土壙14・落込み107出土遺物
図版16　遺物　第3・4・5・6面掘下げ・東西セクション・溝130・141・181出土遺物

挿　図　目　次

図1　調査地点位置図…… 1
図2　調査地位置図…… 2
図3　平安京条坊と調査地位置図…… 2
図4　四行八門と調査位置関係図…… 2
図5　北壁断面図…… 5
図6　ピット列1・2実測図…… 6
図7　路面セクション実測図…… 7
図8　柱穴143・146実測図…… 7
図9　礎石建物1……10
図10　礎石建物2……10
図11　石列1～3実測図……11
図12　井戸7実測図……11
図13　井戸8実測図……12
図14　井戸164実測図……12
図15　弥生土器実測図……13
図16　平安時代土器実測図……14
図17　鎌倉～江戸時代土器実測図…… 15

図18　江戸時代土器実測図１……16
図19　江戸時代土器実測図２……17
図20　軒瓦拓影・実測図……19
図21　銭貨拓影図……20
図22　土製品写真・実測図……22
図23　東洞院大路調査地点図……23
図24　東洞院大路図・復元図……24

表　目　次

表１　遺構概要表……4
表２　遺物概要表……13
表３　銭貨一覧表……21

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査経過

（1）調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区東洞院通六角下る御射山町273である。当該地は周知の埋蔵文化財包含地・平安京左京四条三坊十五町及び烏丸御池遺跡に当たる。2014年７月、当地に野村不動産株式会社によるマンション建設の計画がなされた。既存建物の解体工事に先立ち、埋蔵文化財調査を先行したい旨要望があり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）は、既存建物外の空閑地に対して、新たに建設に関わる範囲を調査対象範囲として指導を行った。市文化財保護課の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査を行うことになり、調査は2014年９月末より開始することとなった。

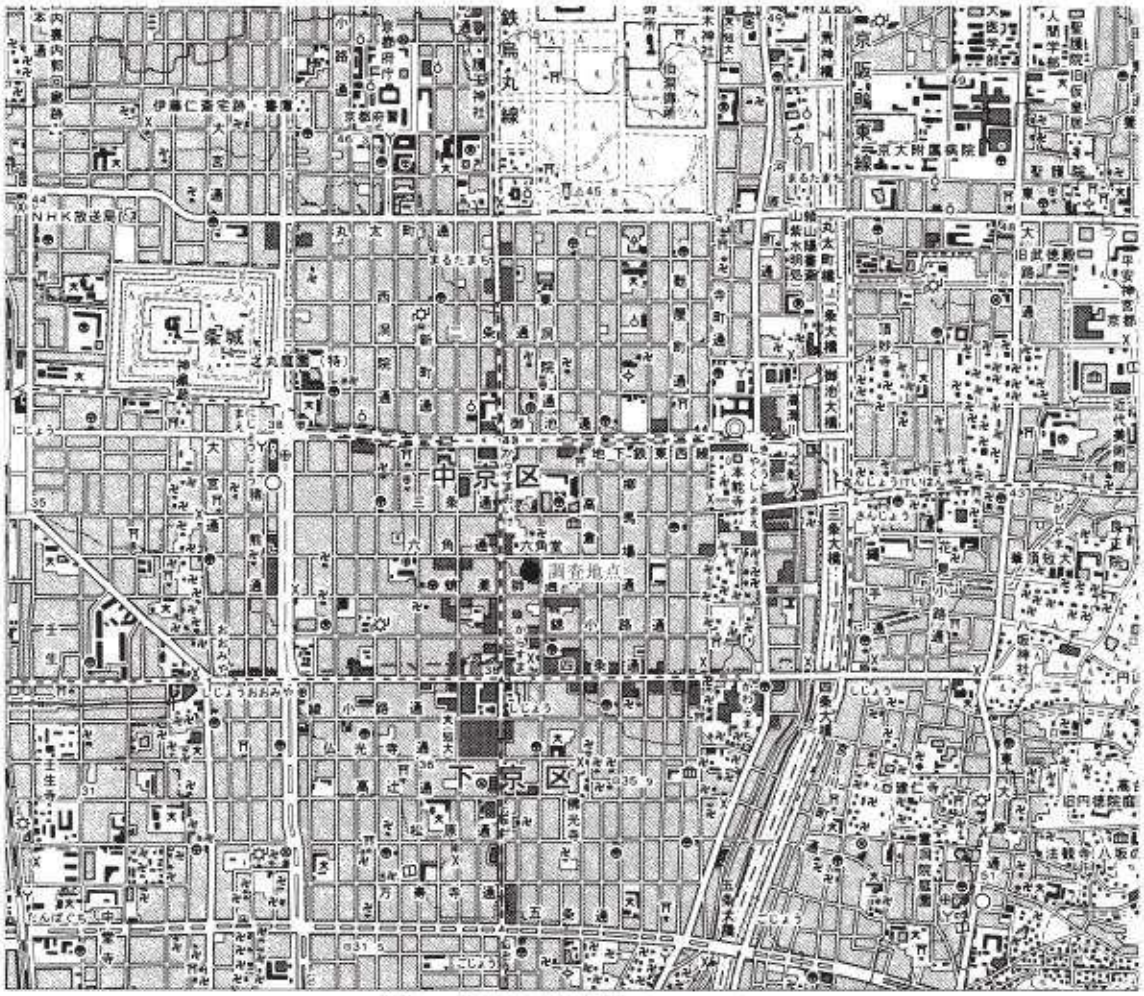


図１　調査地点位置図（1/25,000）

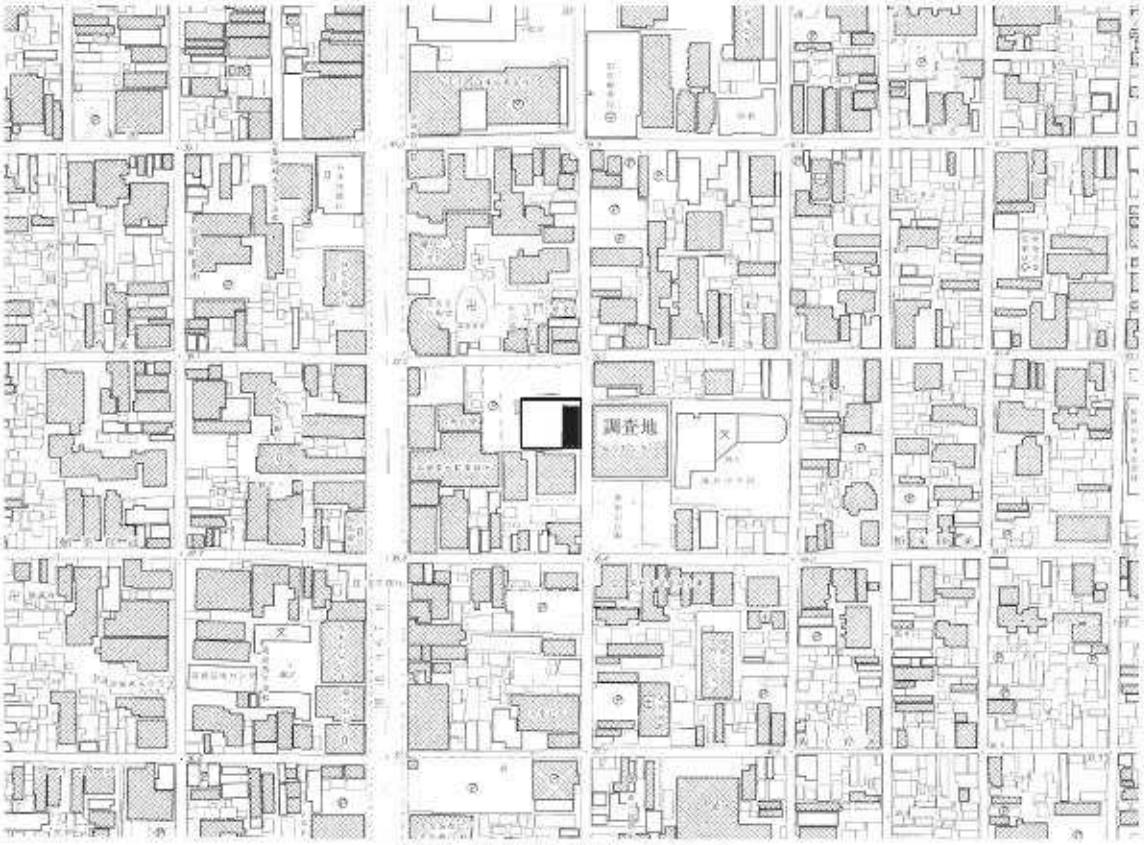


図2　調査地位置図（1/5,000）

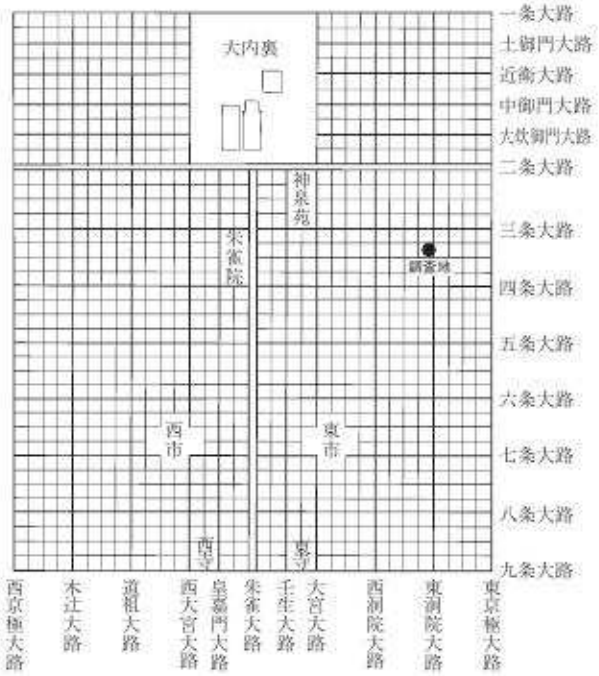


図3　平安京条坊と調査地位置図

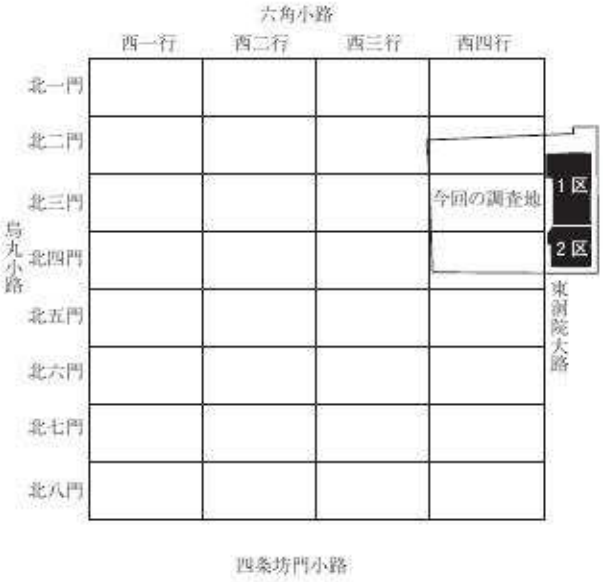


図4　四行八門と調査位置関係図（1/2,000）

（2）調査の経過

調査地は平安京跡の左京四条三坊十五町・東洞院大路跡、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物包含地に当る。

当地は平安時代後期には白河法皇の近臣である藤原国明の六角東洞院第があったとされる。この宅地は後に白河法皇の御所ともなり、その後も藤原家の邸宅として受け継がれる。室町時代の応仁の乱の頃から「上京」と「下京」に市街地が形成され、この場所は「下京」の三町組北東に位置する。江戸時代には泉州岸和田藩岡部氏の京屋敷があった。

調査は、平成26年９月29日から平成26年12月16日まで実働58日間実施した。尚、土置き場を場内に確保するため１区（北側）・２区（南側）に分けて反転した。

2014年９月29日から重機で近現代層を掘削し、江戸時代前期後半の洪水層下面から人力による調査を行った。

調査の方法としては、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵのグリッドを使用し、調査区の北東角を原点（X＝-110,132m、Y＝-21,812m）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、４ｍメッシュのグリッドを基本として遺構・遺物の記録をとる方法を行った。

平安京左京四条三坊十五町の築地四隅の座標値（新座標地系）は（公財）京都市埋蔵文化財研究所による平安京条坊復元モデル60である。

北西	X=-110,103.57m	北東	X=-110,103.08m
	Y=- 21,943.63m		Y=- 21,824.25m
南西	X=-110,222.96m	南東	X=-110,222.47m
	Y=- 21,943.15m		Y=- 21,823.76m

Ⅱ 遺　　構

（1）遺構の概要

平安時代後期から江戸時代後期以降の遺構面を６面検出した。主な遺構としては第１面では江戸時代前期中頃から後期の礎石建物跡、井戸。第２面では江戸時代前期前半の柱列、井戸。第３面では桃山時代の東洞院大路路面・溝（東洞院川）。第４面では室町時代の東洞院大路路面、溝、柱穴。第５面では鎌倉時代の東洞院大路路面・土壙。第６面では平安時代後期の東洞院大路西側溝、ピット列、流れ堆積などがある。

（2）基本層序（図５）

調査地の標高は約38.9mで地表下0.3mの砕石と盛土がある。0.3～1.6mが第２層の近現代の撹乱層。0.4～0.9mが第３～７層の江戸時代中期～後期までの整地層、その中で第５層の焼土層はおそらく蛤御門の変に伴う焼土である。0.9～1.6mが第９層の砂礫層で0.5～0.7mの厚さで調査区全域に堆積する江戸時代前期中頃の洪水層である。1.3～1.6mが第10～14層の江戸時代前期以降の整地層・遺構。1.4～1.8mが第16～19層の黒褐色砂泥・暗褐色砂泥・褐色泥砂にぶい黄褐色粗砂が第１面整地層。1.5～1.7mが第20・21層の暗褐色泥砂・にぶい黄褐色砂泥の第２面の整地層。1.7～1.9mが第31・32層の黒褐色砂泥・オリーブ褐色泥砂の第３面の整地層。1.9～2.2mが第35層の暗褐色砂泥の第４面整地層。2.0～2.2mが第42・43層の暗褐色砂礫・暗オリーブ褐色砂礫の第５面の整地層。以下の第47層が灰オリーブ色粘質シルトの地山となる。

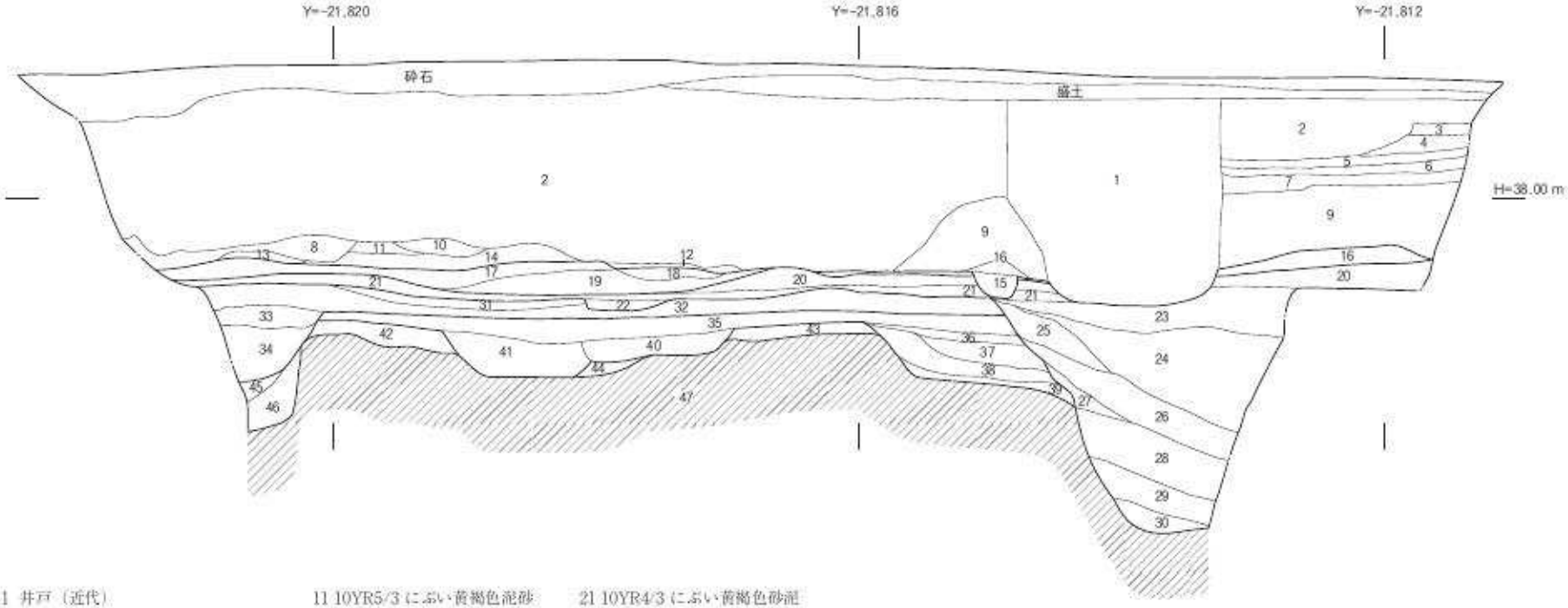
（3）遺　　構

第６面（平安時代の遺構）（図版６・11）

平安時代後期から末期の東洞院西側溝、溝、溝状遺構、ピット列、整地層、流れ堆積などがある。

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代後期（第６面）	溝149・151・181、落込み154、土壙179、ピット列１・２	溝149は西側溝
鎌倉時代（第５面）	路面３、溝144、土壙138・141・172、柱穴143・146、落込み137	路面は東洞院大路路面
室町時代（第４面）	路面２、溝134、土壙136	路面は東洞院大路路面
桃山時代（第３面）	路面１、溝130	路面は東洞院大路路面
江戸時代（第１・２面）	落込み107、井戸２・３・７・８・80・159～162・164・165、土壙４・14、礎石建物１・２、石列１～４	



1 井戸（近代）
2 撹乱
3 10YR4/4 褐色砂泥
4 10YR3/2 黒褐色砂泥
5 7.5YR4/4 褐色焼土
6 2.5Y6/4 にぶい黄褐色中砂
7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
8 7.5YR4/6 褐色焼土
9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫（洪水層）
10 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
11 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
12 10YR3/3 暗褐色泥砂
13 10YR4/2 灰黄褐色粗砂～細砂
14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
15 10YR4/4 褐色泥砂
16 10YR3/2 黒褐色砂泥
17 10YR3/3 暗褐色砂泥
18 10YR4/4 褐色泥砂
19 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
20 10YR3/3 暗褐色砂泥
21 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
22 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂～中砂
23 10YR3/3 暗褐色砂泥（溝130）
24 10YR3/2 黒褐色砂泥（溝130）
25 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（溝130）
26 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（溝130）
27 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（溝130）
28 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（溝130）
29 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂（溝130）
30 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂（溝130）
31 10YR3/2 黒褐色砂泥
32 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂
33 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（溝134）
34 10YR3/2 黒褐色砂泥（溝134）
35 10YR3/3 暗褐色砂泥
36 10YR3/3 暗褐砂泥（土壙137）
37 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（土壙137）
38 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（土壙137）
39 10YR4/4 褐色泥砂（土壙137）
40 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
41 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（溝144）
42 10YR3/3 暗褐色砂礫
43 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫
44 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂（落込み154）
45 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（溝149）
46 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト（溝149）
47 5Y4/2 灰オリーブ色粘質シルト（地山）

0 4 m

図5　北壁断面図（1/50）

溝149（図５、図版13の６）

１区の北西隅で検出した溝である。検出長2.6m、幅0.8m以上、深さ0.65mで西側の調査区外に逆「L」字に折れる。埋土は黒褐色砂泥・暗灰黄色シルトに分かれ、平安時代後期前半の土師器などが出土した。今回調査で最も古い遺構で東洞院西側溝の推定位置にある。

溝181

２区南西側で検出した南北溝である。検出長は南壁から攪乱を挟んで４ｍで北側には延びない。幅1.6m、深さ0.4mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥・灰黄褐砂泥で平安時代後期の土師器などが出土した。

落込み154（図７）

１・２区にかけて西壁へ傾斜する溝状の落込みである。検出長は約20m以上、深さ約0.2mで北東方向から西壁へ傾斜する。埋土は灰黄褐色シルトで平安時代後期の遺物が出土した。

溝151

落込み154と直角に交わる東西方向の溝である。検出長1.8m、幅0.8m、深さ0.1mで浅い皿状を呈する。埋土は灰黄褐砂泥で平安時後期の土師器などが出土した。

ピット列１・２（図６・７、図版13の５）

１区北側で検出した南北方向に1.1m離れて並列するピット列である。直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mの円形で南北に３基である。一部攪乱を受けているが南北の柱間約0.9mで検出距離3.5mから南北４間と推定される。平安時代末期の土師器が出土した。

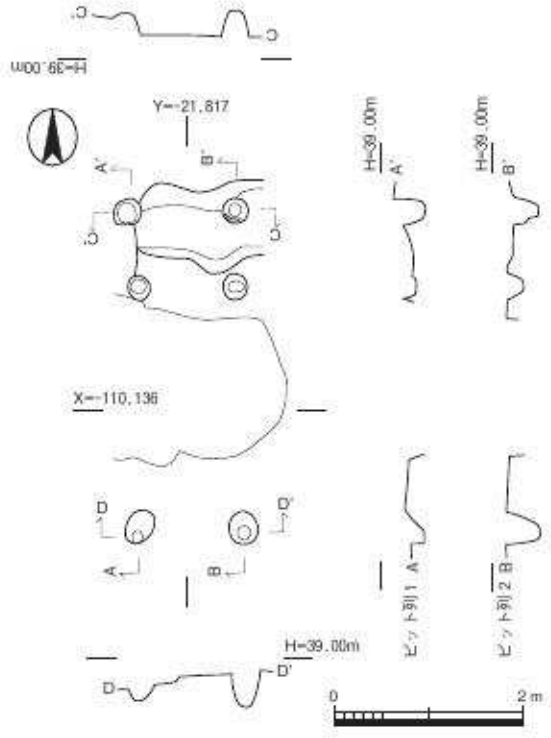


図６　ピット列１・２実測図（1/80）

土壙179

２区南東側で検出した土壙である。南北2.6m以上、東西1.5m、深さ0.9mの方形を呈する。埋土は２層で砂礫・粘土層で流れ堆積層と思われる。平安時代末期の土師器などが出土した。

第５面整地層（図５・７）

東洞院大路路面直下で検出された。図５-42・43、図７-16層で厚さ0.1～0.3mのシルト・砂礫層で調査区全域を覆う洪水の痕跡である。平安時代後期から末期の土師器、輸入陶磁器が出土した。

第５面（鎌倉時代の遺構）（図版５・10）

平安時代末期から鎌倉時代の東洞院大路路面、柱穴、土壙などがある。

東洞院大路路面３（図７）

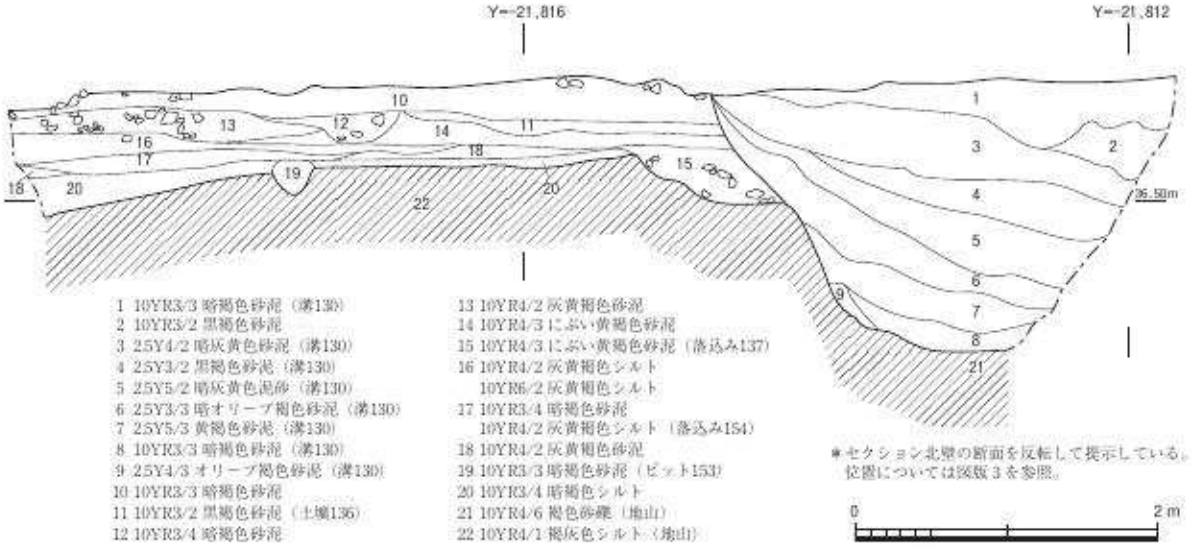


図７　路面セクション実測図（1/50）

中央から西側全域で検出した。路面の厚さ10cm前後で１～５cm大の石を敷締めた面で西半は平坦で、東側へ緩やかに傾斜する。検出幅は東洞院大路西側溝から溝130（第３面の東洞院川）まで幅約６ｍ（２丈）である。

土壙172

２区南東側で検出した土壙である。南北0.9m以上で南壁に延びる、東西2.4m以上、深さ0.9mで形状は不明である。埋土は灰、焼土が堆積し、鎌倉時代後半の土師器、貝、魚骨、獣歯などが出土した。

土壙141

１区中央の東寄りで検出した土壙である。南北1.5m、東西約1.0m、深さ0.45mで方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層で鎌倉時代中頃の土器がまとまって出土した。

柱穴143・146（図８、図版13の４）

１区北寄りの路面上で東西に２基検出した。直径0.7mの楕円形状を呈する。柱穴内には径0.35～0.4m大の石が据えられる。性格は不明である。鎌倉時代中頃の土師器などが出土した。

溝144（図５）

１区第６面溝149の東側で検出した南北溝である。検出長は北壁から3.0mで南には延びない。幅1.0～1.5m、深さ0.3～0.5mである。埋土は灰黄褐色砂泥で鎌倉時代前半の土師器・輸入陶磁器などが出土した。

落込み137

１区北東で検出した南北方向の落込みである。

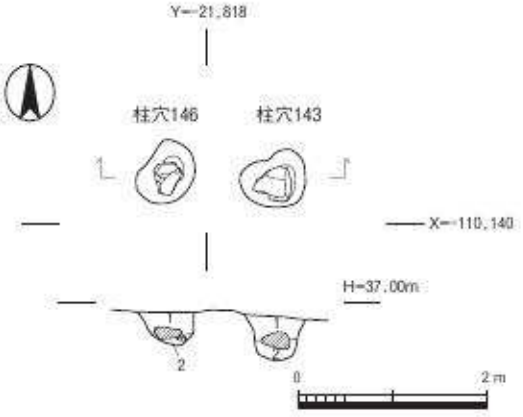


図８　柱穴143・146実測図（1/50）

東側は第３面溝130に攪乱されている。検出長5.4m、幅1.3m以上、深さ0.3～0.6mで東側へ下る。埋土から鎌倉時代後半の遺物が出土した。

土壙138

１区南東で検出した土壙である。北側は攪乱されている。南北1.5m以上、東西1.5m、深さ0.3mで方形を呈する。埋土は暗褐色砂泥で鎌倉時代後半の遺物が出土した。

第４面（室町時代の遺構）（図版４・９）

東洞院大路路面２（図７）

調査区全域で検出した。路面の厚さ0.1～0.2mで２～10cm大の礫が敷かれており、調査区の西半は小礫で密に敷き締められているが東半は疎らである。

溝134（図５）

１区北西隅で検出した南北方向の溝である。検出長3.1m以上、幅1.5m、深さ0.2～0.3mである。埋土から室町時代中頃の土師器が出土した。室町時代の東洞院西側溝の可能性がある。

土壙136

１区北東の第３面溝130西肩部で検出した土壙である。南北5.2m、東西1.9以上、深さ0.6mで方形を呈する。埋土は黒褐色泥砂で室町時代中頃の土師器などが出土した。

第３面（桃山時代）（図版３・８）

室町時代後半から桃山時代の整地層、路面、溝（東洞院川）などがある。

整地層（図５）

路面１、溝130の上層の堆積土で調査区全域において検出した。厚さ0.2～0.4mでブロック状、モザイク状に堆積している。桃山時代の土師器、陶磁器などが出土した。

溝130（東洞院川）（図５・７、図版13の１・２）

１・２区の東側で検出した南北方向の溝である。幅3.0m以上で東側へ延びる。深さは検出面から1.8m以上で東側へ下がる。埋土は場所によって異なるが大きく２層に分かれる。第１～３層は溝を埋めた土で、第４～９層は溝の堆積土である。第１～３層からは桃山時代の遺物が出土し、第４～９層からは平安時代後期から室町時代末期の遺物が出土しており、溝は桃山時代に廃絶されたと考えられる。

東洞院大路路面１

調査区全域で検出した。路面の厚さ0.1～0.3mで２～10cm前後の礫が用いられている。１区側では密に敷締められているが２区側は疎らである。

第２面（江戸時代前期前半）（図版２・７の２）

江戸時代前期前の井戸、石列、土壙、落込みなどがある。

土壙14

１区南西で検出した土壙である。南北2.5m、東西2.1m以上、深さ0.25mである。埋土から江戸時代前期中頃の土師器、陶磁器と伴に坩堝、鏡型など鋳造遺物が多量に出土した。

井戸80（図版12の３）

１区の北西隅で検出した素掘りの井戸である。直径1.2m、深さ1.4m以上である。埋土から江戸時代前期前半の土師器、施釉陶器などが出土した。

落込み107

１区北の西壁際で検出した落込みである。検出長は南北3.9m、東西1.7m以上、深さ0.15mで西壁へ傾斜する。埋土から江戸時代前期前半の土師器、陶磁器と大型の坩堝など出土した。

石列４（図版12の４）

１区の土壙14の北端で検出した東西方向の石列である。東・西側は攪乱を受けており、検出したのは2.1m幅で８石が残存していた。石は0.2～0.5m大のチャート石・花崗岩などで北面する。建物の縁石か敷地境界か詳細は不明である。

第１面（江戸時代前期中頃以降）（図版１・７の１）

江戸時代前期中頃から後期の礎石建物、石列、井戸、土壙などがある。

礎石建物１（図９、図版12の１）

１区で検出した礎石建物である。一部礎石は抜取られているが遺存している礎石から東西柱間1.0mの等間で東西７間（７m）以上、北辺と南辺の距離6.6mから柱間0.9～1.0mで南北７間と推定される。礎石は0.5～0.9m大の石が据えられた大型の東西建物である。礎石の掘形から江戸時代前期中頃の遺物が出土した。

礎石建物２（図10）

礎石建物１の北側で検出した礎石建物である。一部抜取られているが東西6.9m（７間）以上、南北3.0m（３間）で柱間0.9～1.0mである。礎石は0.2～0.7m大の石が据えられている。柱筋は不揃えであるが東西建物として復原した。

石列１・２・３（図11）

１区の北半で東西方向に検出した根石である。一部抜取られているが石列１は４基、石列２は３基、石列３は３基が残存していた。いずれの石列も東西柱間1.0mである。南北の柱間は石列１と石列２は1.8m、石列２と石列３は2.1mである。石列１は礎石建物２の庇、石列２・３は礎石建物１の束石の可能性があるが柱筋が通っていなので復元に至らなかった。江戸時代前期中頃である。

井戸２

１区北側で井戸７の東隣りで検出した素掘井戸である。掘形径1.7～2.2mの楕円形を呈する。深さは検出面から1.7mまで確認した。埋土から江戸時代後末期の陶磁器が出土した。

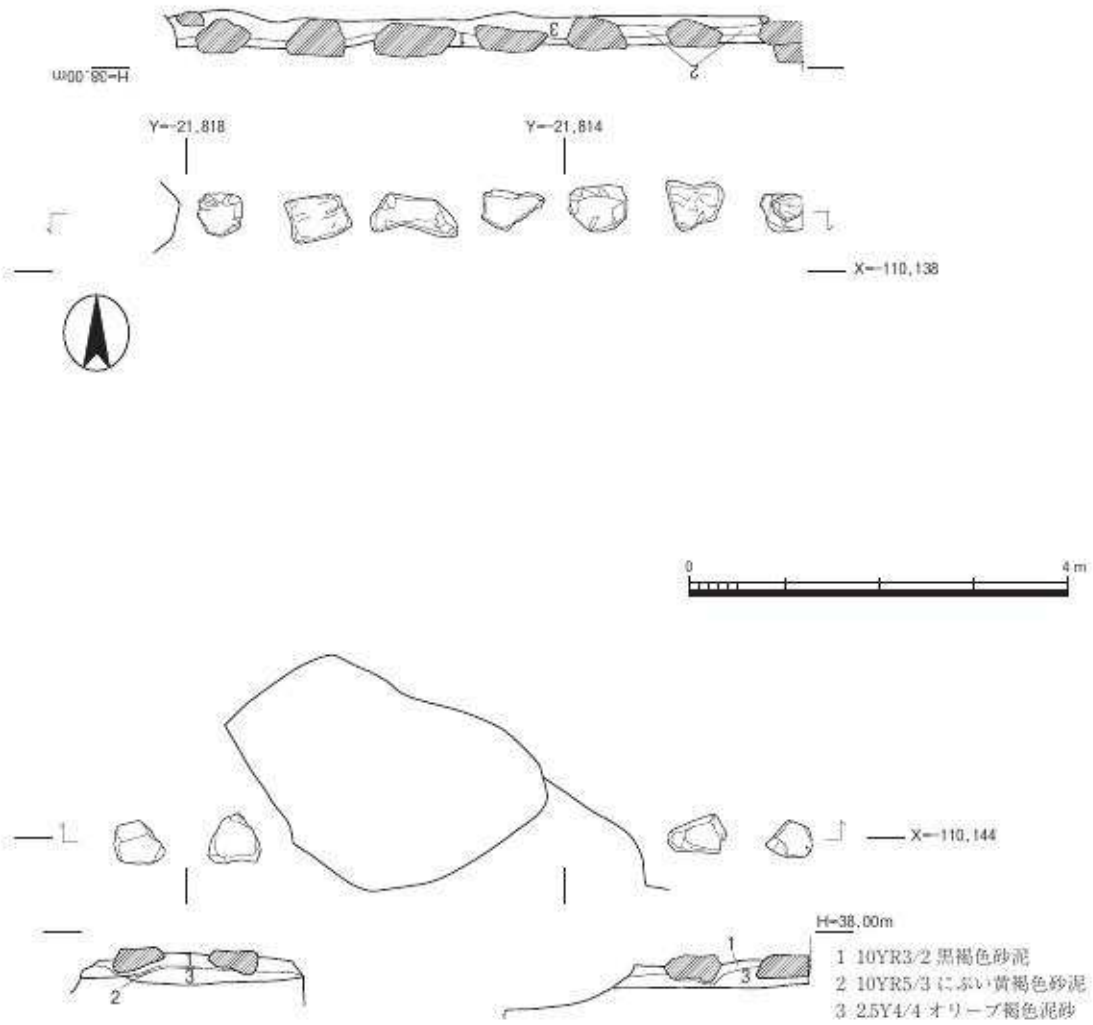


図9　礎石建物1実測図（1/80）

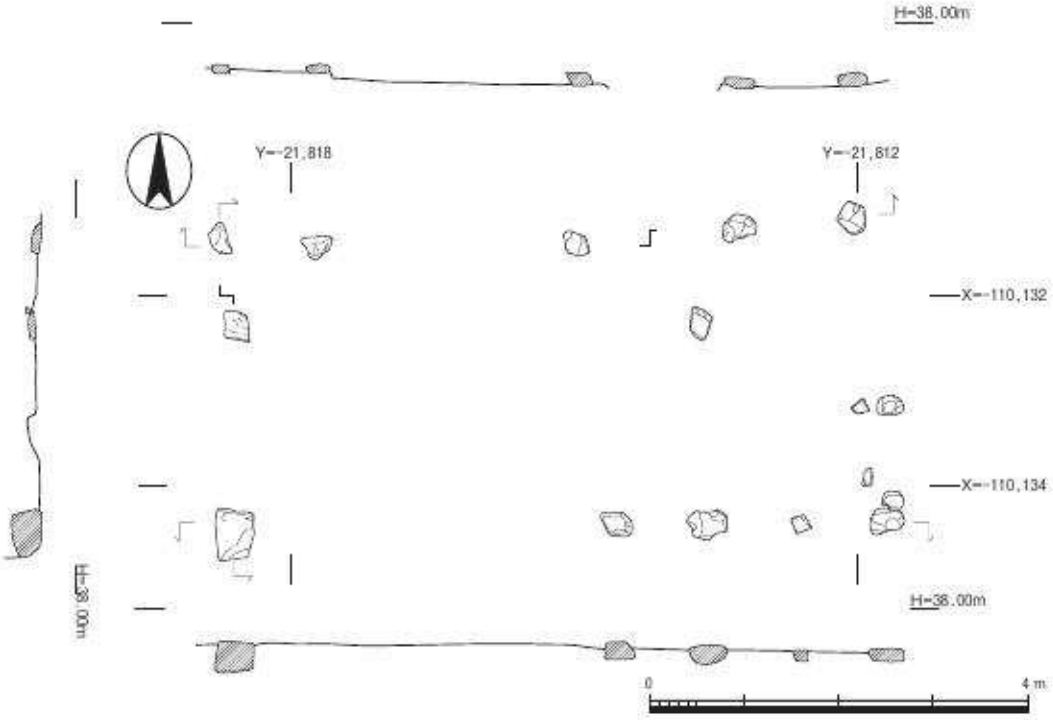


図10　礎石建物2実測図（1/80）

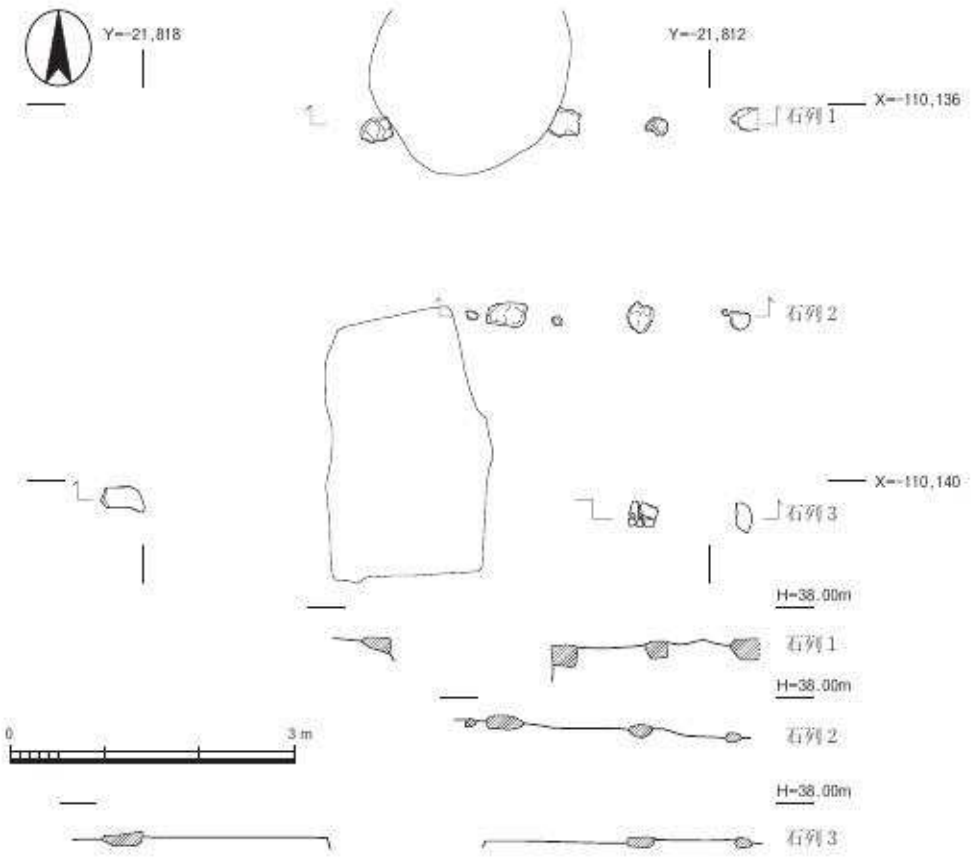


図11　石列１～３実測図（1/80）

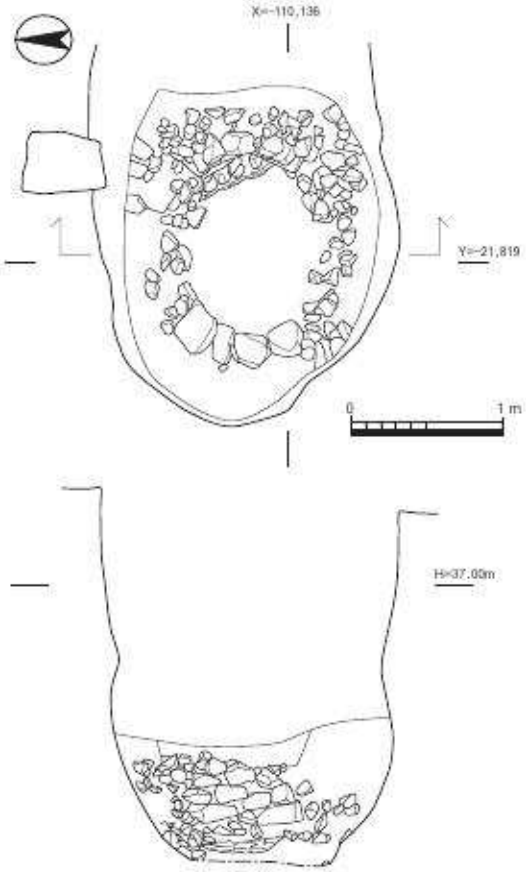


図12　井戸７実測図（1/50）

井戸３

１区北東で検出した井戸である。掘形の径2.1～2.2mの楕円形を呈する。深さは検出から2.1mまで確認する。素掘りであるが石は抜き取られたものと思われる。埋土から江戸時代後期の陶磁器が出土した。

土壙４

１区北の西壁際で検出した土壙である。南北1.2m、東西0.5m、深さ0.1mで西半は調査区外である。埋土から江戸時代前期中頃の土師器、陶磁器などが出土した。

井戸７（図12）

１区北西で検出した石組井戸である。掘形は直径2.0mの楕円形を呈する。検出面から1.7m前後に円形に組まれた石組３段部分が残存していた。石組の内径1.0mである。埋土から江戸時代後期の陶磁器が出土した。

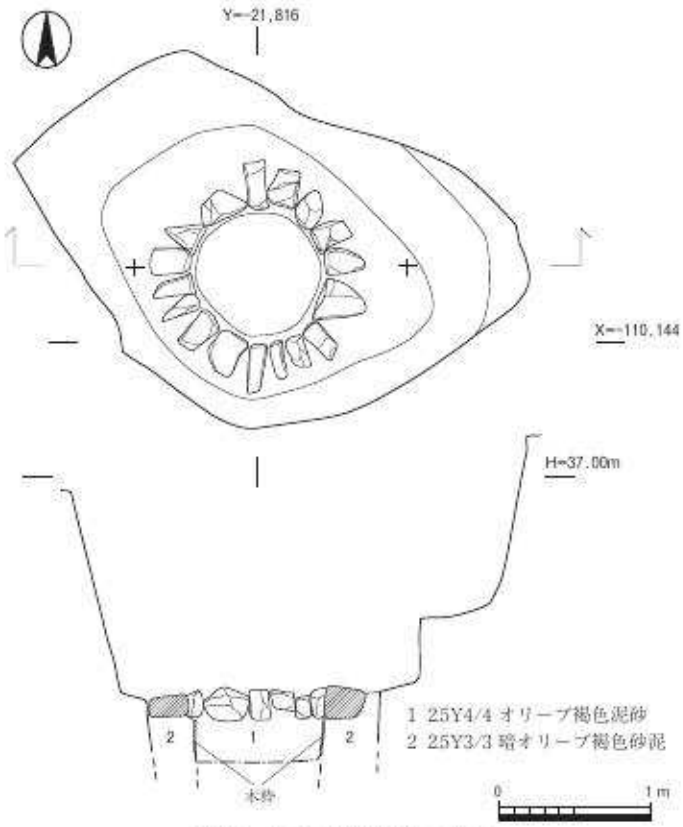


図13　井戸８実測図（1/50）

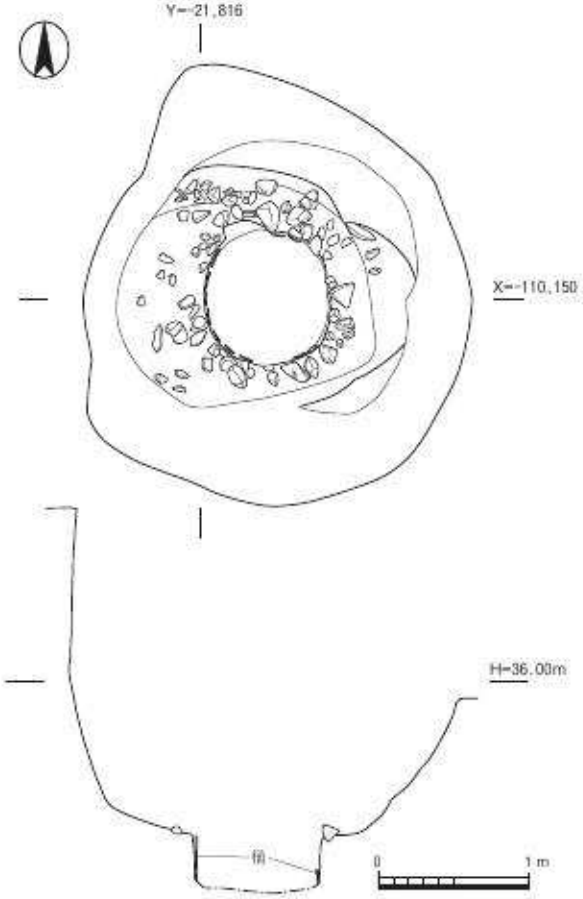


図14　井戸164実測図（1/50）

井戸８（図13）

１区中央部で検出した石組井戸である。掘形は2.0mで攪乱を受けていたため形状は不明である。検出面から2.1mに円形に組まれた石組1段分が残存していた。石組の下には木枠が設置されていた。内径は0.9mである。埋土から江戸時代後期の陶磁器が出土した。

井戸159

２区で検出した漆喰井戸である。掘形の径1.4mの円形で、内径0.6mである。埋土から江戸時代以降の陶磁器が出土した。

井戸160

井戸161を切っている石組井戸である。掘形の径2.1m、検出面から0.7mで花崗岩の円形の石組が残存していた。内径1.2mである。埋土から近代の遺物が出土した。

井戸161

井戸160に切られる漆喰井戸である。掘形の径2.0m、内径0.85mの円形を呈する。埋土から江戸時代以降の陶磁器が出土した。

井戸162（図版７）

井戸159と161に切られる漆喰井戸である。掘形の径2.1mで形状は不明で内経1.6mの円形である。埋土から江戸時代後期の陶磁器が出土した。

井戸164（図14、図版12の２）

２区で検出した石組井戸である。検出面から2.1mに石組の遺物が残存していた。この下には径0.8m程

の桶が設置されていた痕跡が確認された。埋土から江戸時代中期頃の土師器などが出土した。

井戸165

２区南側で検出した素掘井戸である。西側は井戸159に攪乱される。掘形の径約1.8mの円形を呈する。深さは検出面1.5mまで確認した。埋土から江戸時代後末期の陶磁器が出土した。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器１点		
平安時代	土師器、灰釉陶器、磁器、黒色土器、軒瓦、瓦、銭貨		土師器29点、灰釉陶器１点、輸入磁器２点、須恵器１点、軒瓦10点、銭貨31点		
鎌倉時代	土師器、土師質、施釉陶器、磁器、焼締陶器、軒瓦、瓦、銭貨、骨		土師器16点、輸入磁器１点、軒瓦２点、銭貨１点		
室町時代	土師器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、軒瓦、瓦、銭貨		土師器17点、輸入磁器１点輸入染付１点、施釉陶器１点、軒瓦１点、銭貨２点、		
桃山時代	土師器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質陶器、瓦、銭貨		土師器13点、土師質土器２点、施釉陶器３点		
江戸時代	土師器、磁器、施釉陶器、染付、焼締陶器、瓦質陶器、瓦、土製品、銭貨		土師器51点、土師質土器７点、施釉陶器16点、土製品７点、輸入磁器２点・染付２点、焼締陶器３点、銭貨１点		
合計		116箱	226点（９箱）	107箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より９箱多くなっている。

Ⅲ 遺　　物

（1）遺物の概要

出土遺物は、整理箱にして107箱である。その内訳は土器類が大半を占めるが、少量であるが鋳造遺物なども出土した。時代は桃山時代から江戸時代前期が最も多く、次に鎌倉時代から室町時代で、平安時代後期となる。

平安時代以前の遺物は弥生時代の壺と高坏の破片が２点出土している。なお、時代区分は平安京の土器編年[註1]をもとにした。

（2）土　　器

弥生土器（図15、図版14）

弥生土器壺（１）で肩部から頸部の一部で櫛描紋が巡る。弥生時代中期頃と考えられる。

溝149（図16、図版14）

土師器皿Ａ（２～４）、同皿Ｎ・杯Ｎ（５～７）、灰釉陶器椀（８）、輸入白磁玉縁椀（９）がある。８は口径8.8cmで小

図15　弥生土器実測図（1/4）

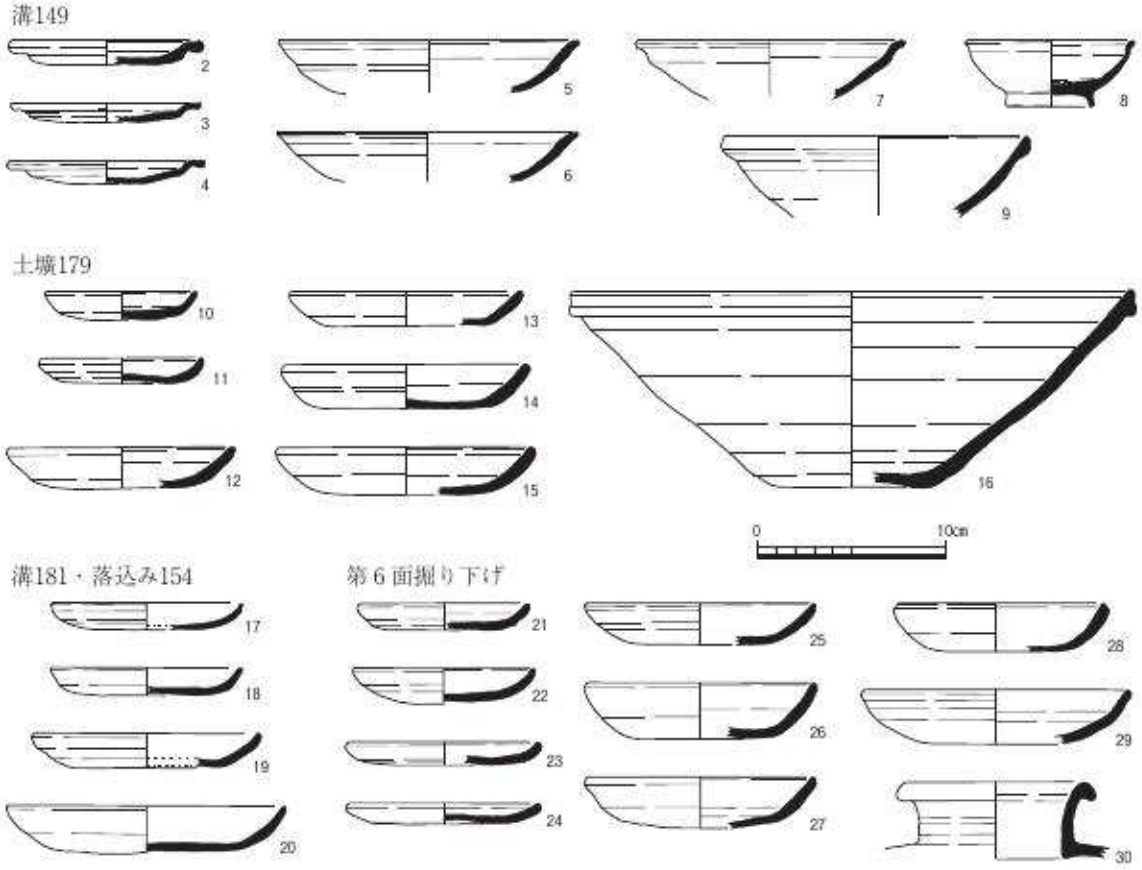


図16　平安時代土器実測図（1/4）

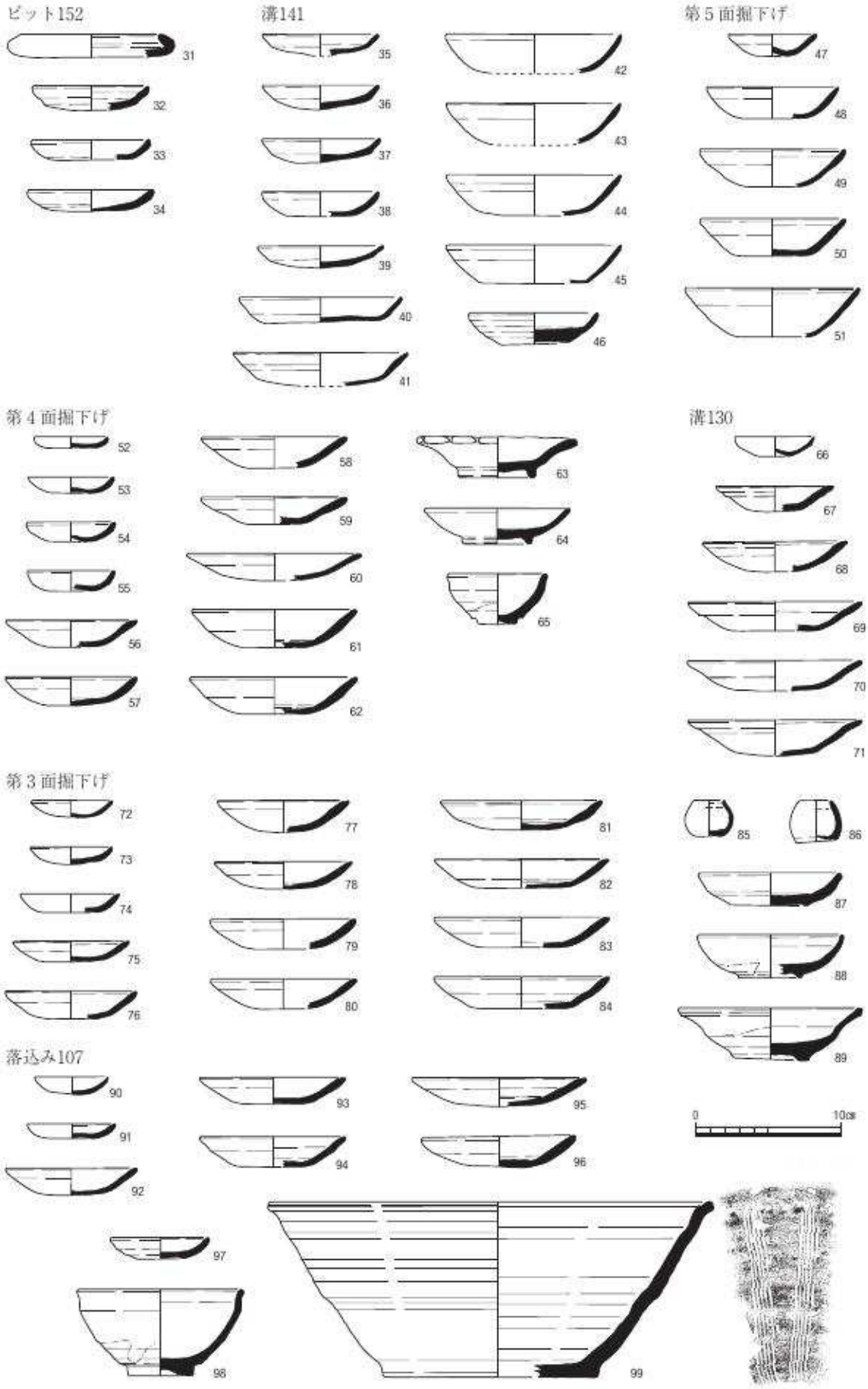


図17　鎌倉～江戸時代土器実測図（1/4）

振りのタイプである。Ⅳ期中段階のものである。

土壙179（図16、図版14）

土師器皿（10）、同皿N（11～15）、須恵器鉢（16）がある。10は轆轤土師器で底部にヘラ起こし痕が見られる。Ⅴ期中段階のものである。

溝181・落込み154（図16、図版14）

土師器皿N（17～20）がある。19が落込み154、他は溝181であるが同一遺構と考えられる。Ⅴ期中段階のものである。

第6面（路面）掘下げ（図16、図版14）

土師器皿N（21～29）、輸入白磁瓶（30）である。Ⅴ期中から新段階のものである。

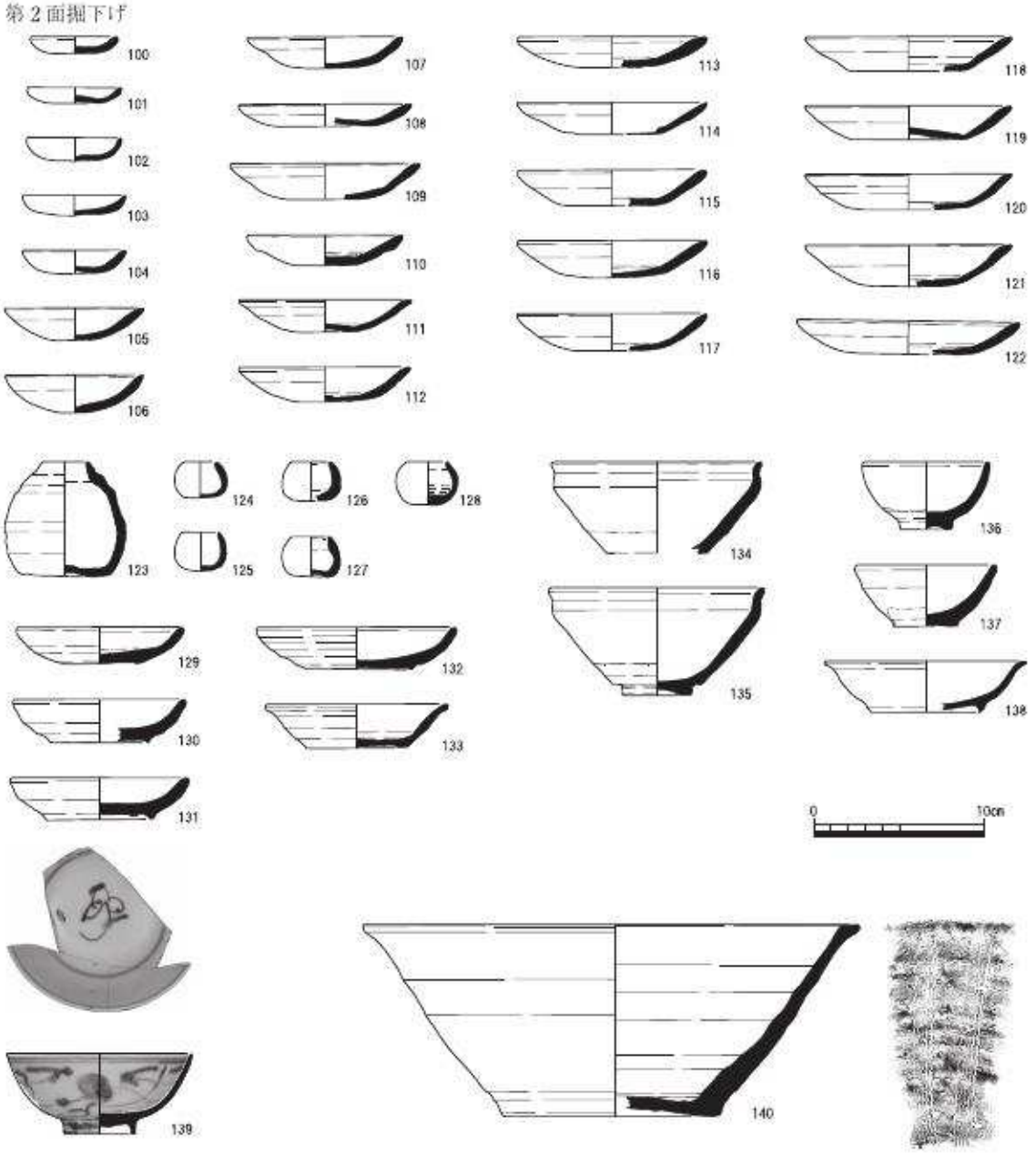


図18　江戸時代土器実測図1（1/4）

ピット152（図17）

土師器皿Ａｃ（31）、同皿Ｎ（32～34）がある。ピットからまとまって出土した。Ｖ期中から新段階のものである。

溝141（図17、図版14）

土師器皿Ｎ（35～45）、輸入白磁皿（46）がある。46の口縁に煤が付着する。Ⅵ期新からⅦ期古段階のものである。

第５面（路面）掘下げ（図17）

土師器皿Ｓｈ（47）、同皿Ｓ（48～51）がある。Ⅶ期中段階のものである。

第４面（路面）掘下げ（図17、図版14）

土師器皿Ｎｒ（52～55）、同皿Ｓｂ（56～60）、同皿Ｓ（61・62）、輸入青磁皿（63）、同染付皿（64）、美濃瀬戸天目茶碗（65）がある。63は花弁の皿で、内面にはヘラで草文様が描かれている。64は内外面に呉須で二条線が描かれ、見込み部分は無釉である。Ｘ期新からXI期古段階のものである。

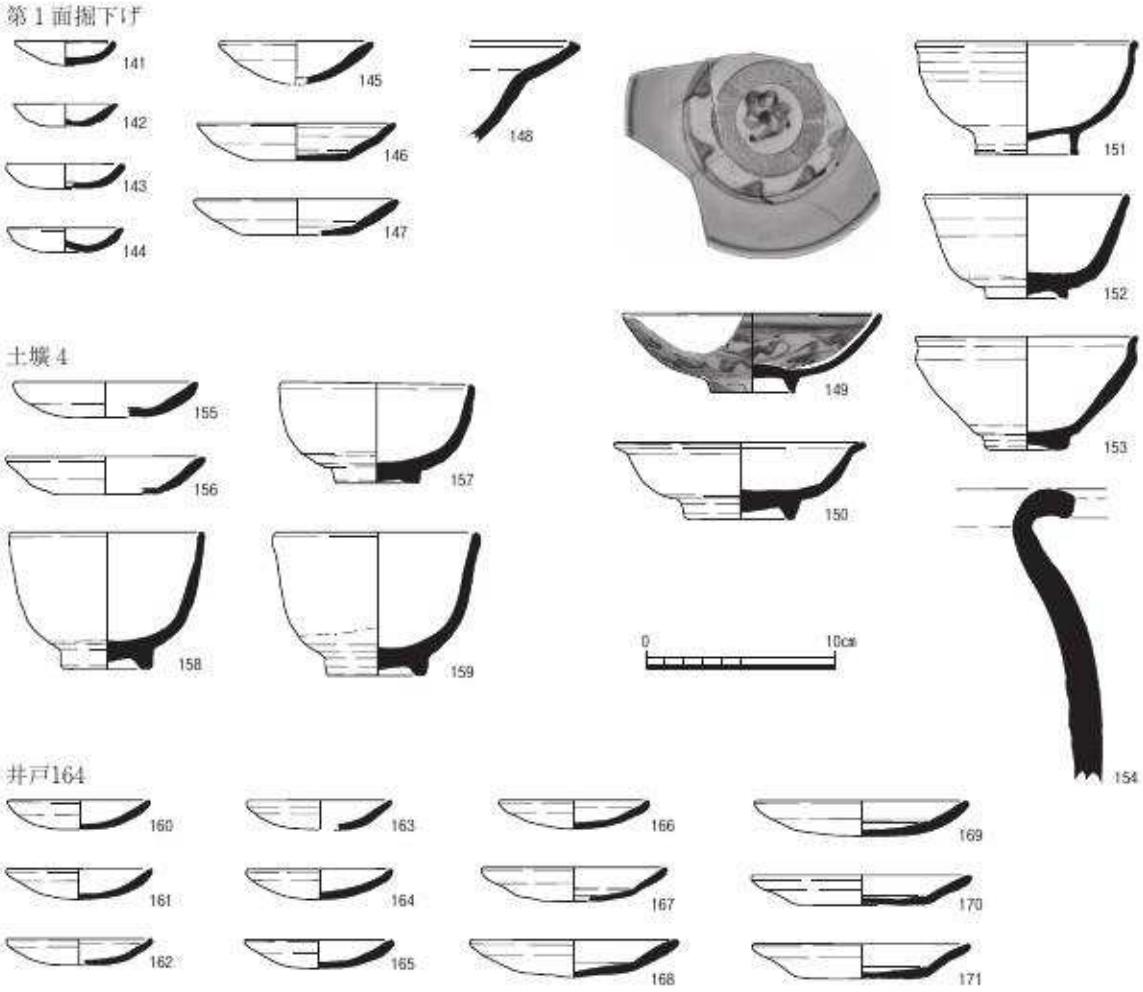


図19　江戸時代土器実測図２（1/4）

溝130（図17）

土師器皿Ｎｒ（66）、同皿Ｓ（67～71）がある。66・67は第１層から出土したものでXI期古段階に属しており、溝が埋められた最終期のものと考えられる。68～71はＸ期新段階のものである。

第３面掘下げ（図17、図版14）

土師器皿Ｎｒ（72～74）、同皿Ｓｂ（75～80）、同皿Ｓ（81～84）、土師器つぼつぼ（85・86）、瀬戸灰釉皿（87）、唐津陶器皿（88）、同鉢（89）がある。89は見込みに砂目の痕。この層は溝130が埋められた直後の整地層と考えられる。XI期古段階のものである。

落込み107（図17、図版15）

土師器皿Ｎｒ（90・91）、同皿Ｓｂ（92）、同皿Ｓ（93～96）、瀬戸灰釉小皿（97）、美濃瀬戸天目茶碗（98）、焼締陶器信楽擂鉢（99）がある。95は内面に煤が付着しており、灯明皿として使われていたと思われる。98は体部に鉄泥が施されていることから建盞天目を模倣したものと考えられる。97はほぼ完存品である。99は内面の摺目は一単位５本である。

第２面掘下げ（図18、図版15）

土師器皿Ｎｒ（100～104）、同Ｓｂ（105～109）、同皿Ｓ（110～122）、同塩壺身（123）、同つぼつぼ（124～128）、瀬戸灰釉皿（129～131）、美濃瀬戸志野皿（132）、同鉄釉皿（133）、同天目茶碗（134・135）、唐津椀（136・137）、輸入白磁皿（138）、同染付椀（139）、焼締陶器信楽擂鉢（140）がある。106～110・115・118は口縁部に煤が付着する。123は京都産の焼塩壺である。124～128は大きさが大・中・小と３種類がある。138は内面に目痕が見られる。134・135はいずれも体部に鉄泥が施されており、建盞天目の模倣と思われる。139は見込み・外面に草文様が描かれる。畳付けには砂が付着する。漳州窯系と思われる。140は内面の摺目は一単位５本である。XI期中段階のものである。

第１面掘下げ（図19、図版15）

土師器皿Ｎｒ（141～144）、同皿Ｓｂ（145）、同皿Ｓ（146・147）、同鍋（148）、輸入染付椀（149）、同白磁皿（150）、京焼軟質陶器椀（151）、唐津丸椀（152）、美濃瀬戸天目茶碗（153）、焼締陶器丹波甕（154）がある。149は内外面に草花文様が描かれる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。漳州窯系と思われる。150は乳白色の釉が施され、貫入が見られる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで胎土は陶器質である。151は全面に緑釉が施されるが銀化する。胎土は密で精良である。153も体部に鉄泥が施されている。XI期新段階のものである。

土壙４（図19、図版15）

土師器皿Ｓ（155・156）、美濃瀬戸志野丸椀（157）、同系褐釉椀（158）、唐津椀（159）がある。158は内外面に鉄釉が筆で施釉されている。胎土は密で、高台の露体部分は丁寧なナデ調整が施されている。159はやや小降りであるが呉器形を呈している。XI期新からXII期古段階のものである。

井戸164（図19）

土師器皿Ｓｂ（160～166）、同皿Ｓ（167～171）がある。167～171は体部が屈曲ぎみに開くも

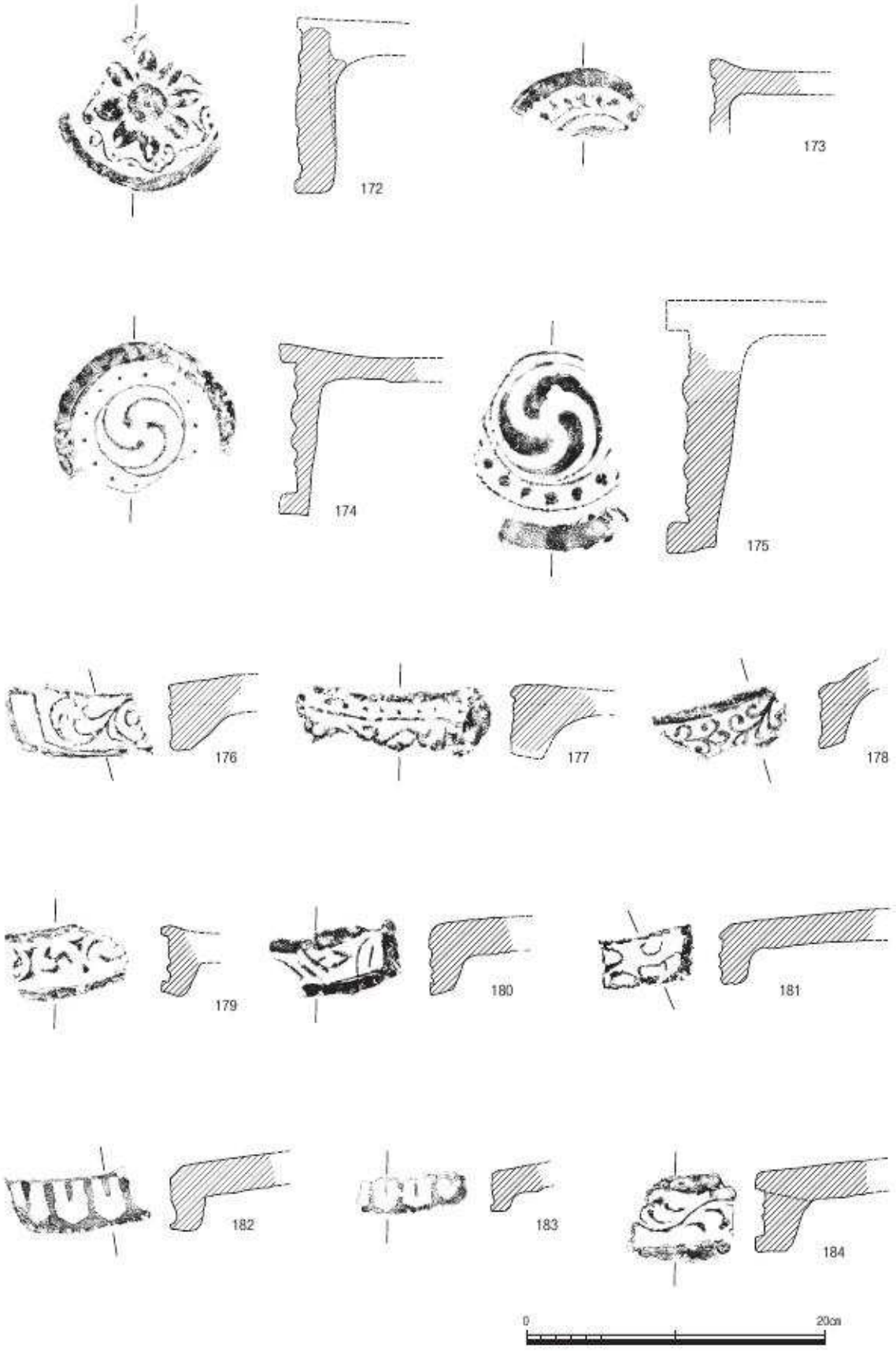


図20　軒瓦拓影・実測図（1/4）

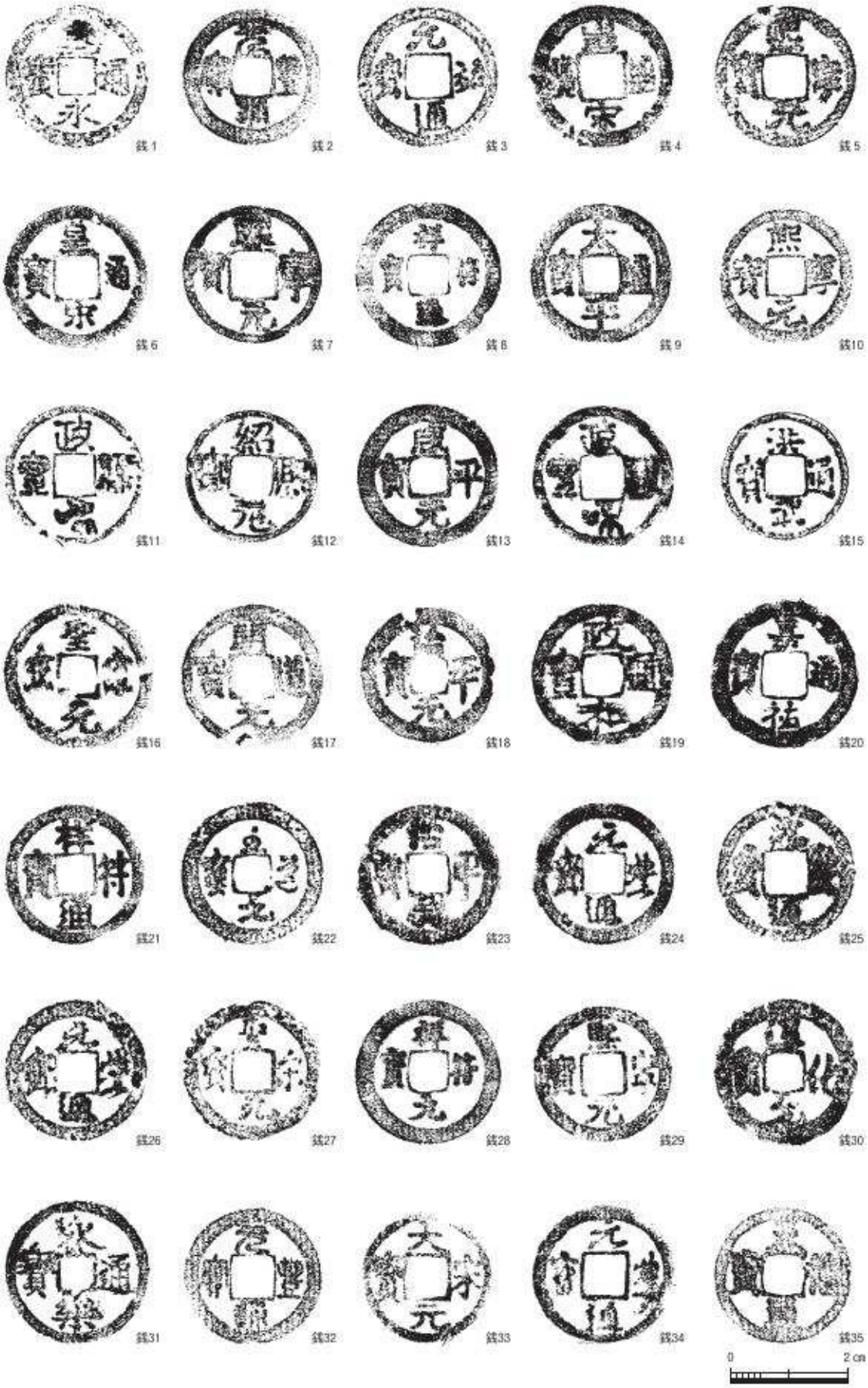

錢1
錢2
錢3
錢4
錢5
錢6
錢7
錢8
錢9
錢10
錢11
錢12
錢13
錢14
錢15
錢16
錢17
錢18
錢19
錢20
錢21
錢22
錢23
錢24
錢25
錢26
錢27
錢28
錢29
錢30
錢31
錢32
錢33
錢34
錢35
0
2 cm

図21　銭貨拓影図（1/1）

のと直線的に開くものが混在している。見込みの凹線状圏線は棒状の器具で付加された加飾型である。XIV期古段階のものである。

（3）瓦　　類（図20、図版16）

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（172）　溝181出土。中房の蓮子は不明、外区に唐草文を配する。胎土は砂粒を含み、淡灰色を呈する。平安時代後期。

三巴文軒丸瓦（173）　第６面掘下げ出土。外区に珠文を密に配する。胎土は砂粒と３㎜前後の

表３　銭貨一覧表

遺物番号	種類	出土遺構・層	年代	外径（㎜）	重量（g）	年　号	遺構年代
銭１	寛永通宝	第１面遺構検出	1636	23.4	3.13	寛永15年	江戸時代前期
銭２	元豊通宝	礎石１掘下げ	1078	23.9	3.20	北宋、元豊元年	江戸時代前期
銭３	元祐通宝	第１面堀下げ	1086	24.4	3.08	北宋、元祐元年	江戸時代前期
銭４	皇宋通宝	第１面堀下げ	1039	24.7	3.40	北宋、宋元２年	江戸時代前期
銭５	熙寧元宝	第１面堀下げ	1068	24.5	3.81	北宋、熙寧元年	江戸時代前期
銭６	皇宋元宝	第１面堀下げ	1039	25.1	2.72	北宋、宋元２年	江戸時代前期
銭７	熙寧元宝	第１面堀下げ	1068	23.9	3.16	北宋、熙寧元年	江戸時代前期
銭８	祥符通宝	第２面堀下げ	1009	25.2	3.28	北宋、大中祥符２年	江戸時代前期
銭９	太平通宝	第２面堀下げ	976	24.5	2.81	北宋、太平興国元年	江戸時代前期
銭10	熙寧元宝	第２面堀下げ	1068	23.5	2.64	北宋、熙寧元年	江戸時代前期
銭11	政和通宝	第２面堀下げ	1111	24.5	2.86	北宋、政和元年	江戸時代前期
銭12	紹熙元宝	第２面堀下げ	1190	23.2	1.93	南宋、紹熙元年	江戸時代前期
銭13	咸平元宝	第２面堀下げ	998	24.4	2.77	北宋、咸平元年	江戸時代前期
銭14	政和通宝	第２面堀下げ	1111	24.4	2.50	北宋、政和元年	江戸時代前期
銭15	洪武通宝	第２面堀下げ	1368	22.1	1.33	明、洪武元年	江戸時代前期
銭16	聖宋元宝	第２面堀下げ	1101	24.5	2.81	北宋、建中靖国元年	江戸時代前期
銭17	明道元宝	第２面堀下げ	1032	24.6	2.75	北宋、明道元年	江戸時代前期
銭18	治平元宝	第２面堀下げ	1064	23.4	2.83	北宋、治平年間	江戸時代前期
銭19	政和通宝	第２面堀下げ	1111	24.9	2.10	北宋、政和元年	江戸時代前期
銭20	嘉祐通宝	第２面堀下げ	1056	25.6	3.26	北宋、嘉祐年間	江戸時代前期
銭21	祥符通宝	第２面堀下げ	1009	24.6	2.98	北宋、大中祥符２年	江戸時代前期
銭22	至道元宝	第２面堀下げ	995	25.6	3.26	北宋、至道年間	江戸時代前期
銭23	治平元宝	第２面堀下げ	1064	24.4	3.82	北宋、治平年間	江戸時代前期
銭24	元豊通宝	第２面堀下げ	1078	24.8	3.46	北宋、元豊元年	江戸時代前期
銭25	元豊通宝	土壙87	1078	25.0	3.69	北宋、元豊元年	江戸時代前期
銭26	元豊通宝	土壙87	1078	24.0	2.00	北宋、元豊元年	江戸時代前期
銭27	聖宋元宝	第２面堀下げ	1101	24.5	3.74	北宋、建中靖国元年	江戸時代前期
銭28	祥符元宝	第２面堀下げ	1008	24.8	3.28	北宋、大中祥符元年	江戸時代前期
銭29	熙寧元宝	第３面堀下げ	1068	23.9	3.67	北宋、熙寧元年	桃山時代
銭30	淳化元宝	第３面堀下げ	990	24.3	2.99	北宋、淳化元年	桃山時代
銭31	永楽通宝	溝130	1498	25.0	3.19	明、永楽６年	室町時代
銭32	元豊通宝	第４面堀下げ	1078	24.0	3.13	北宋、元豊元年	鎌倉時代
銭33	大宋元宝	土壙137	1225	22.5	3.06	南宋、宝慶元年	鎌倉時代
銭34	元豊通宝	土壙137	1078	24.3	3.34	北宋、元豊元年	鎌倉時代
銭35	天禧通宝	第４面堀下げ	1017	23.8	3.03	北宋、天禧元年	鎌倉時代

小石を多く含み、オリーブ灰色を呈する。平安時代後期。

三巴文軒丸瓦（174） 第４面（路面）掘下げ出土。左巻きで尾部が重なる。外区に珠文を配する。胎土は砂粒を含み、精良で灰色を呈する。平安時代後期。

三巴文軒丸瓦（175） 溝141出土。左巻きで、外区に珠文を配する。胎土は砂粒を含み、精良で灰色を呈する。鎌倉時代。

均整唐草文軒平瓦（176） 東西セクション第１層（第３面路面）出土。瓦当面に布目痕、裏面には格子タタキが施される平安時代後期。

唐草文軒平瓦（177） 第４面掘下げ出土。外区に珠文を配する。胎土は砂粒を多く含み、浅黄色を呈する。平安時代後期

均整唐草文（178） 第４面掘下げ出土。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。平安時代後期。

連巴文軒平瓦（179） 第４面掘下げ出土。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。平安時代後期。

唐草文軒平瓦（180） 第３面掘下げ出土。胎土は砂粒を多く含み灰白色を呈する。平安時代後期。

唐草文軒平瓦（181） 第６面掘下げ出土。胎土は砂粒と３～６㎜の小石を含み、精良で浅黄色を呈する。平安時代後期。

剣頭文軒平瓦（182） 第５面掘下げ出土。弁の先は三角形と四角のものが交互に配されている。胎土は砂粒を多く含み、灰白色を呈する。平安時代後期。

剣頭文軒平瓦（183） 第４面掘下げ出土。胎土は砂粒２～３㎜の小石を含み、灰色を呈する。鎌倉時代。

唐草文軒平瓦（184） 溝130出土。胎土は砂粒を含み密で、灰色を呈する。室町時代。

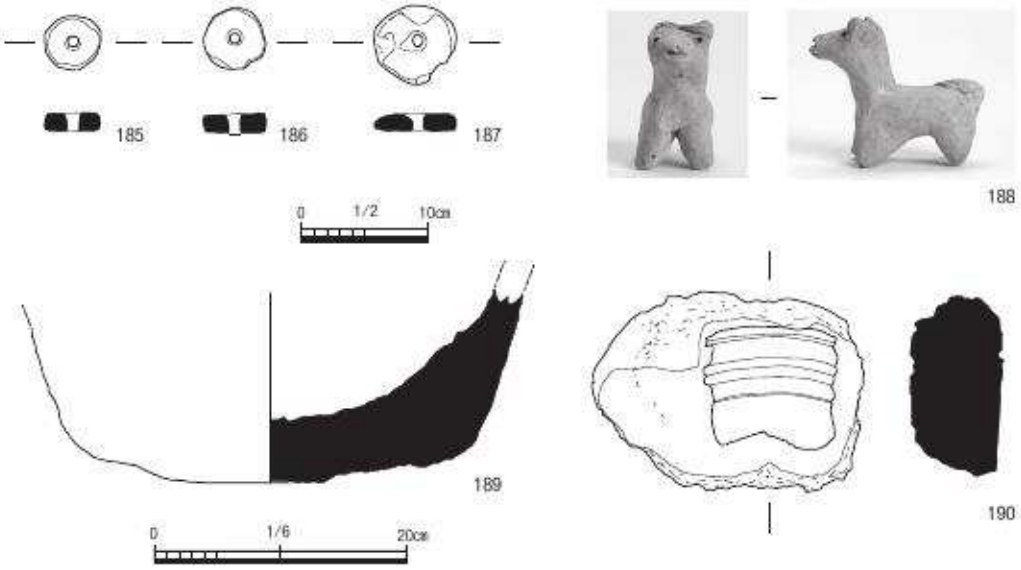


図22 土製品写真・実測図（1/2・1/6）

（4）銭　　貨（図21、表3）

銭貨は破片、判読できないものを含めて91枚である。その大半は渡来銭で国内銭は2枚であった。渡来銭は北宋がもっとも多く、明、元などである。国内銭は古寛永通宝である。良好なものを掲載した。

（5）土 製 品（図22、図版15）

土師器玩具（185～187）、同人形犬（188）、185～187は土師器皿底部を加工し、穿孔したもので大きさは1.5cm・1.7cm・2.2cmで3種類ある。玩具として使用したものと思われる。188は全長4.8cm、高さ4.0cmである。第2面掘下げ出土。

坩堝（189）は残存部の直径39cmを測り、この様な大型の坩堝は出土例がない。XI期中段階のものである。落込み107出土。

鋳型（190）、フイゴ（191）がある。190は鏡の型で、胎土には稲藁のスサが多く、他に砂粒と3～5㎜程の石が含まれている。191は羽口で胎土には稲藁のスサと白色の砂粒が多く見られる。出土遺物から江戸時代前期のものと思われる。土壙14出土。

Ⅳ まとめ

調査地は左京四条三坊十五町の東洞院大路の西半に当っている。調査では平安時代後期から桃山時代の東洞院大路の路面・西側溝・東洞院川、東洞院大路道路内で江戸時代の建物跡、井戸などを検出した。東洞院大路で東洞院川を検出したのは今回が初例である。東洞院大路関連の既調査（図23）と今回の成果を基に東洞院大路の変遷を時代順に述べる。

東洞院大路は、『延喜式』左右京職京程によれば幅８丈（約24m）、築地６尺（約1.8m（半分３尺、0.9m）犬行５尺（約1.5m）、側溝４尺（約1.2m）、路面５丈６尺（約16.8m）と記載されている（図24）。

東洞院大路は現東洞院通と重複しているため調査で大路全体を検出したことはない。今までの調査で東洞院大路関連の側溝・路面・川などの遺構が検出されたのは８例（図23）で、北から順に記述する。二条四坊三町の調査１では平安時代前期から中期と室町時代後期の東側溝（南北溝1645・2000）、路面と東側溝と重複する平安時代前期以前の流路（溝2070）がある。築地芯から東端までの距離は溝2000が2.0mで幅１m。溝1645は3.5m、溝幅は1.5mである。室町時代には宅地の道路側への浸食が始まっている。流路2070は報告がないため詳細不明である。この路面内も室町時代以降は建物跡などが検出され宅地化する。

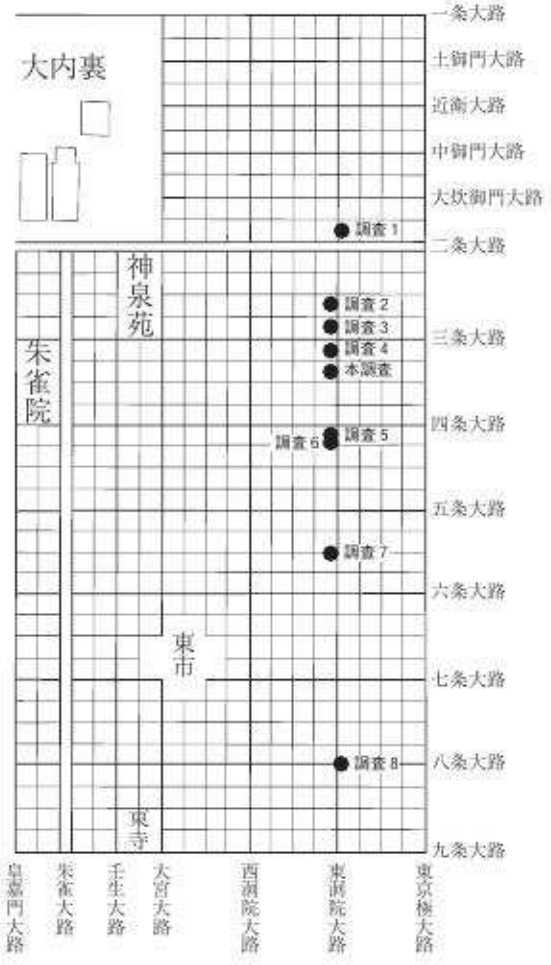


図23　東洞院大路調査地点図

三条三坊十四町の調査２では室町時代後期の西側溝（SD２）・路面、北西方向の濠１がある。西側溝は築地芯から西端まで2.5m、幅2.0m、深さ1.0mを測り、規模が大きく濠状を呈する。

三条三坊十三町の調査３では室町時代中期～末期の西側溝・堀・路面である。西側溝は雨落ち状で詳細不明である。堀684は築地芯から西端まで約4.0mでやや東寄りではあるが西側溝と推定されている。

四条三坊十六町の調査４では壁が崩壊して調査はできなかったが西側溝推定線上で濠状の遺構が確認されている。

五条三坊十六町の調査５では西側溝推定地の東側に濠（SD1330）があり、底で室町時代初期の土壙が検出されている。埋没は江戸時代初期と推定されている。

五条三坊十六町の調査６は調査５の北東で隣接している。試掘調査では平安時代末期と鎌倉時代後期から室町時代初期の路面、西側溝（溝２・３）が検出された。調査５の濠状の遺構は検出されていない。

六条三坊十四町の調査７では平安時代後期と室町時代後期（濠２）の西側溝、路面が検出されている。桃山時代には調査区外へ移動したものと思われる。

八条四坊四・五町の調査８では平安時代末期から鎌倉時代の路面と東側溝（溝４）が検出されている。溝４は築地芯から東端まで２ｍに位置する。

以上がこれまで調査で検出された東洞院大路の関連遺構である。今回の調査では平安時代後期、室町時代後半の西側溝と平安時代末期から室町時代末期の路面を検出した。側溝は既調査では室町時代後半のものが大半を占めているのは、室町時代に幅、深さの規模が大きく改修され溝から濠化し、防御性が増した結果、重複する下層の溝が削平されて、室町時代の側溝が多く残ったためと思われる。平安時代末期と室町時代初期の２基検出しているのは本調査地と調査６で、これはたまたま再掘削位置がずれた結果だと思われる。平安時代前期から中期の側溝が検出したのが調査１である。調査地が室町時代後期に形成された「上町」と「下町」から外れているからである。

路面も平安時代後期から室町時代末期で後期以前の路面は検出されていない。また室町時代以降は整地層で覆われて宅地化されている。本調査を含めて調査１・２・３・６・７で確認されている。これは豊臣秀吉による京都都市改造によって町割りが変更され街路が移設されたからである。

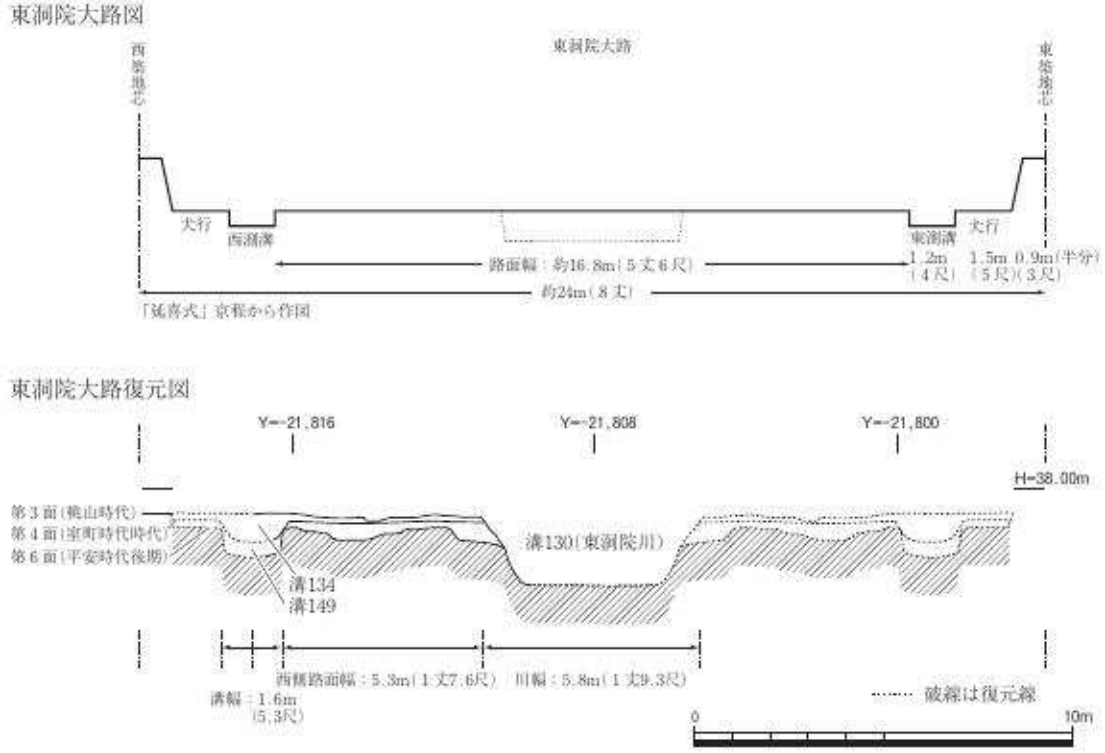


図24　東洞院大路図・復元図（1/200）

川（東洞院川）の記述には「東洞院川　東洞院大路にあり。一条より大炊御門に至り。西流して烏丸に至り。南流して冷泉に至り又西折して室町に至り。[注2]」とあり、大炊御門大路から西へ曲り烏丸小路に流れていたとあるが、大炊御門大路の南側に位置する調査１で検出した溝2070は東側溝と重なるが南流する溝で洪水時のための排水溝で東洞院川の一部の可能性がある。

これ以外では東洞院大路道路上で川などの検出例はない。検出した遺構から東洞院大路の復元図（図23）を作成した。西側溝（溝134・149）は築地芯から溝芯までが3.0m、幅1.6m、路面幅約5.3m（溝130西肩）で、反転復元すると川幅は約5.8mとなる。時代によってやや変化はあるが西堀川小路跡[注3]とほぼ状況は同じである。都市改造によって埋没し、町家が形成される。東洞院川はいつ掘削されたかは不明だが、川（溝130）の堆積土から平安時代後期から室町時代末期の遺物などが出土しており、埋没したのは桃山時代で明らかである。また、図５・７の断面形状を見ると中段から外反し、形状に変化がある。これは溝の掘りかえしで溝は幾度も改修されていたと考えられる。出土遺物や形状からは掘削された時期の根拠は明らかにする事はできないが、調査１で検出された平安時代前期の溝2070が東洞院川の可能性があり、当調査の溝130もこの延長上にあるものと思われる。洪水時の平安京の都市機能を維持するために造営当初から東洞院川は掘削されていたものと思われる。

今回の調査では東洞院大路の中央に溝（東洞院川）が検出され、大路の構造が明らかになった。特に、廃絶されたのが桃山時代の天正期で、これは豊臣秀吉が御土居造営など京都の都市改造を行った時期と一致する。東洞院大路の西半は、川が廃絶された後に宅地が形成され現在の通りに至ったものと考えられ、三条通以南では川の東側道路が三条以北では川の西側道路が維持され、洛中における防御的都市構造の一端を明らかにすることができた。以上が今回の調査成果である。

調査１「平安京左京二条四坊」『平成10年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2000年

調査２「平安京左京三条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982年

調査３「平安京左京三条三坊」『平成３年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年

調査４「平安京左京四条三坊」『昭和61年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年

調査５『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会　1998年

調査６『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-21（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2013年

調査７「平安京左京六条三坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年

調査８『平安京左京八条四坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006-20（財）京都市埋蔵文化財研究所　2007年

註

註１　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年

註２　『京都坊目誌』新修京都叢書　第２巻　臨川書店　1969年

註３　「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和55年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1981年

「右京三条二坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年

『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2007-3（財）京都市埋蔵文化財研究所　2007年

『平安京右京京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2014年

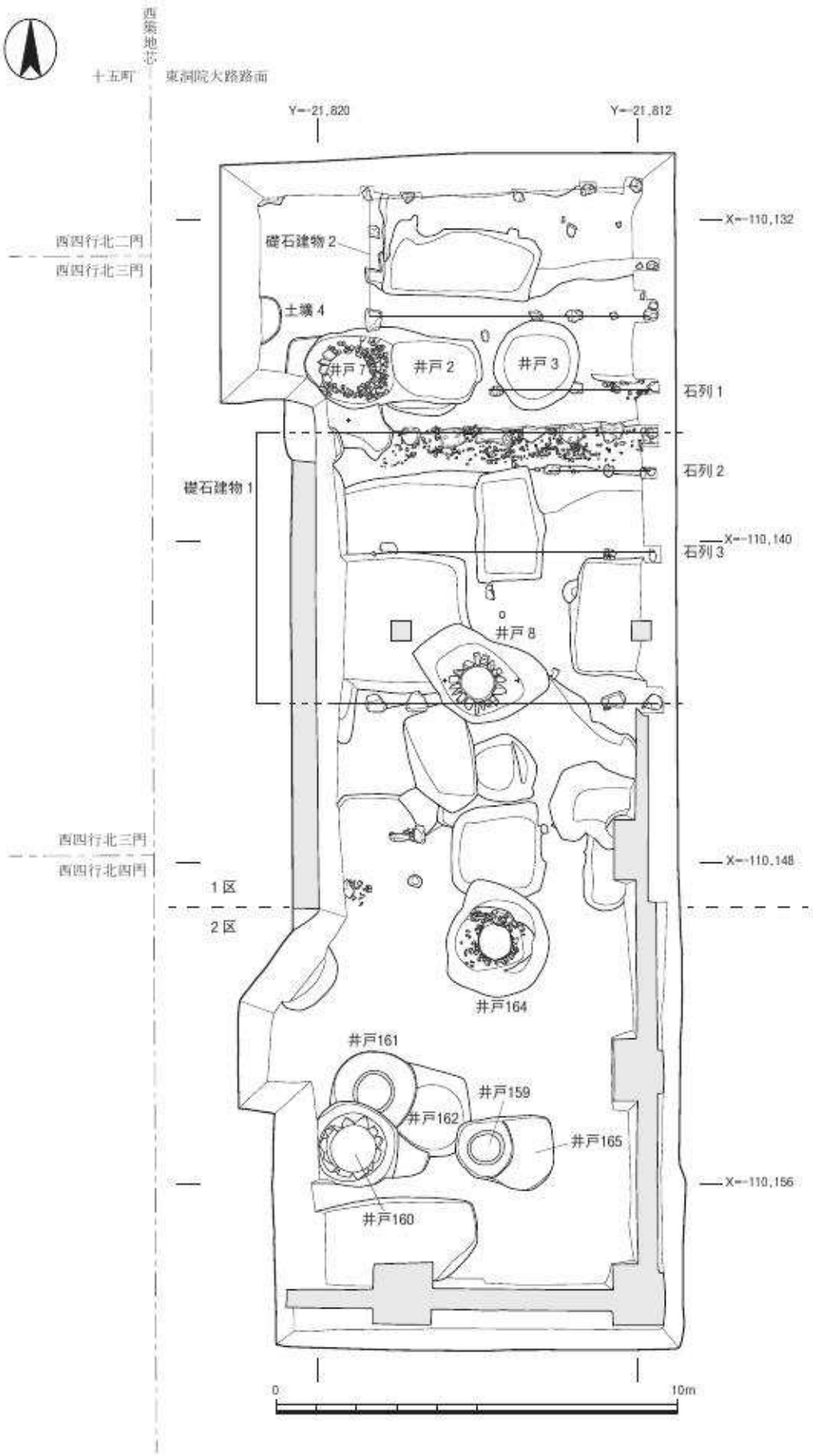
報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうさんぼうじゅうごちょう・からすまおいけいせき
書　　名	平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡
副 書 名	御射山町の調査
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小松武彦
編集機関	古代文化調査会
所 在 地	〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中１丁目４番地125-1404
発行年月日	2015年３月31日

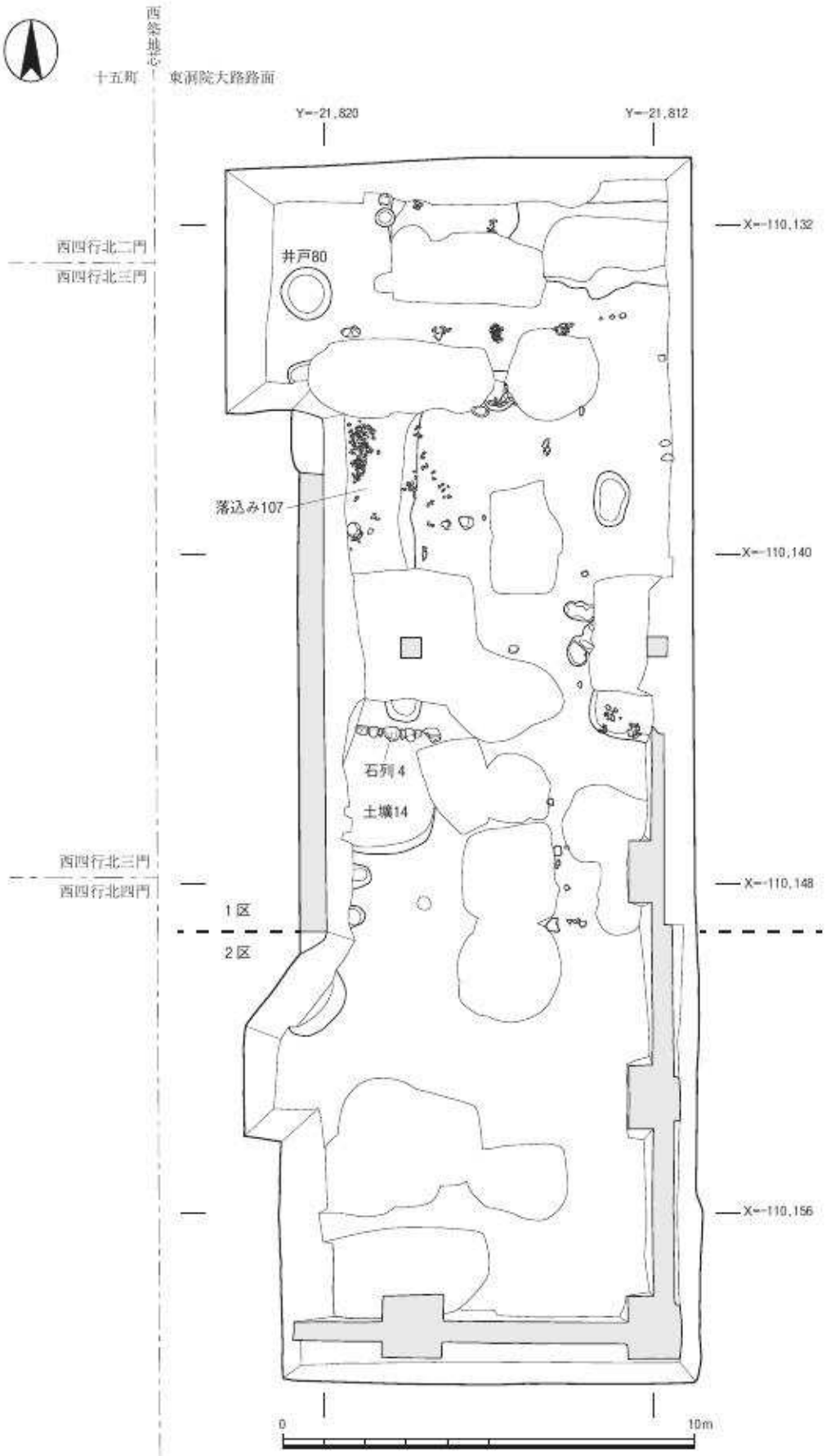
所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京（へいあんきょう） 左京四条三坊（さきょうしじょうさんぼう） 十五町（じゅうごちょう）・ 烏丸御池遺跡（からすまおいけいせき）	京都市中京区（きょうとしなかぎょうく） 御射山町（みさやまちょう）273	26100	1 464	35度 00分 25秒	135度 45分 39秒	2014年９月29日～2014年12月16日	306㎡	建物新築工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡	都城跡	平安時代後期～末期	溝、ピット列、土壙、流れ堆積	土師器、灰釉陶器、輸入磁器、須恵器、軒瓦、瓦、銭貨	平安時代後期の東洞院大路西側溝、鎌倉時代～桃山時代東洞院大路路面、溝（東洞院川）、江戸時代前期の礎石建物跡
		鎌倉時代	溝、柱穴、土壙、路面	土師器、輸入磁器、瓦、軒瓦、焼締陶器、銭貨	
		室町時代	路面、溝、土壙	土師器、輸入磁器、焼締陶器、国産陶器、軒瓦、瓦、銭貨	
		桃山時代	路面、溝	土師器、国産陶磁器、焼締陶器、軒瓦、瓦、銭貨	
		江戸時代	礎石建物、柱列、石列、土壙、井戸	土師器、国産陶磁器、軒瓦、瓦、銭貨	

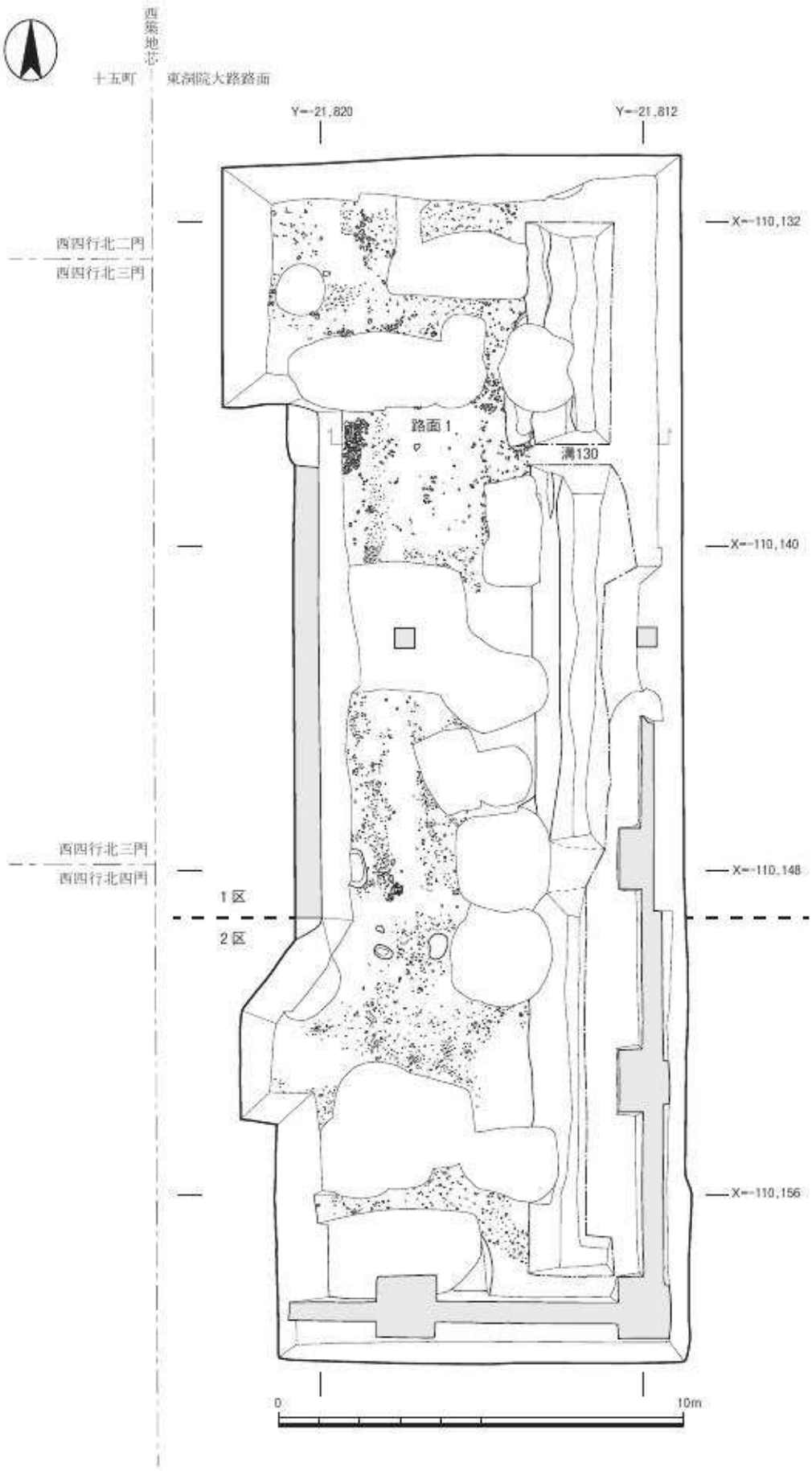
図　　版



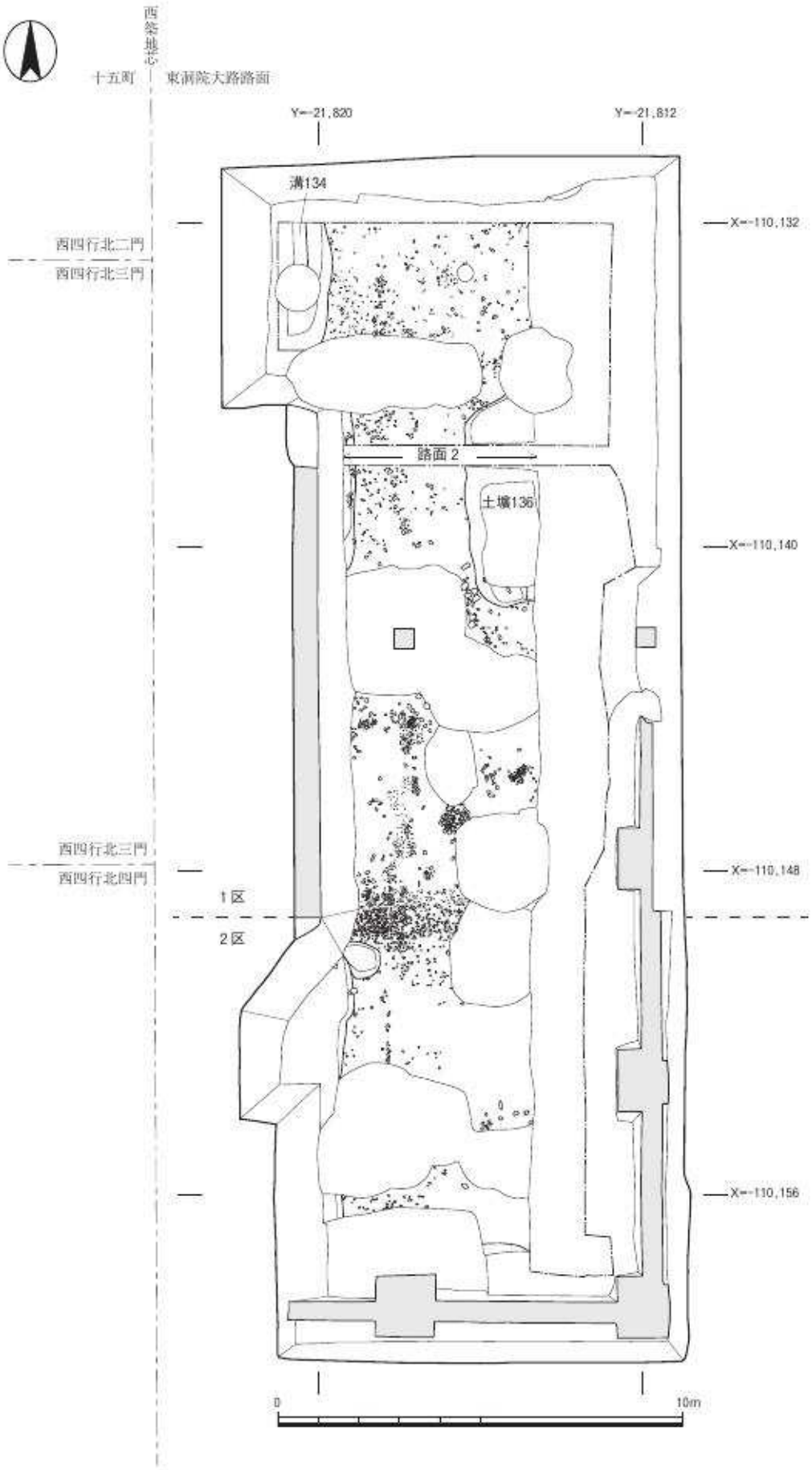
第 1 面遺構実測図（1/150）



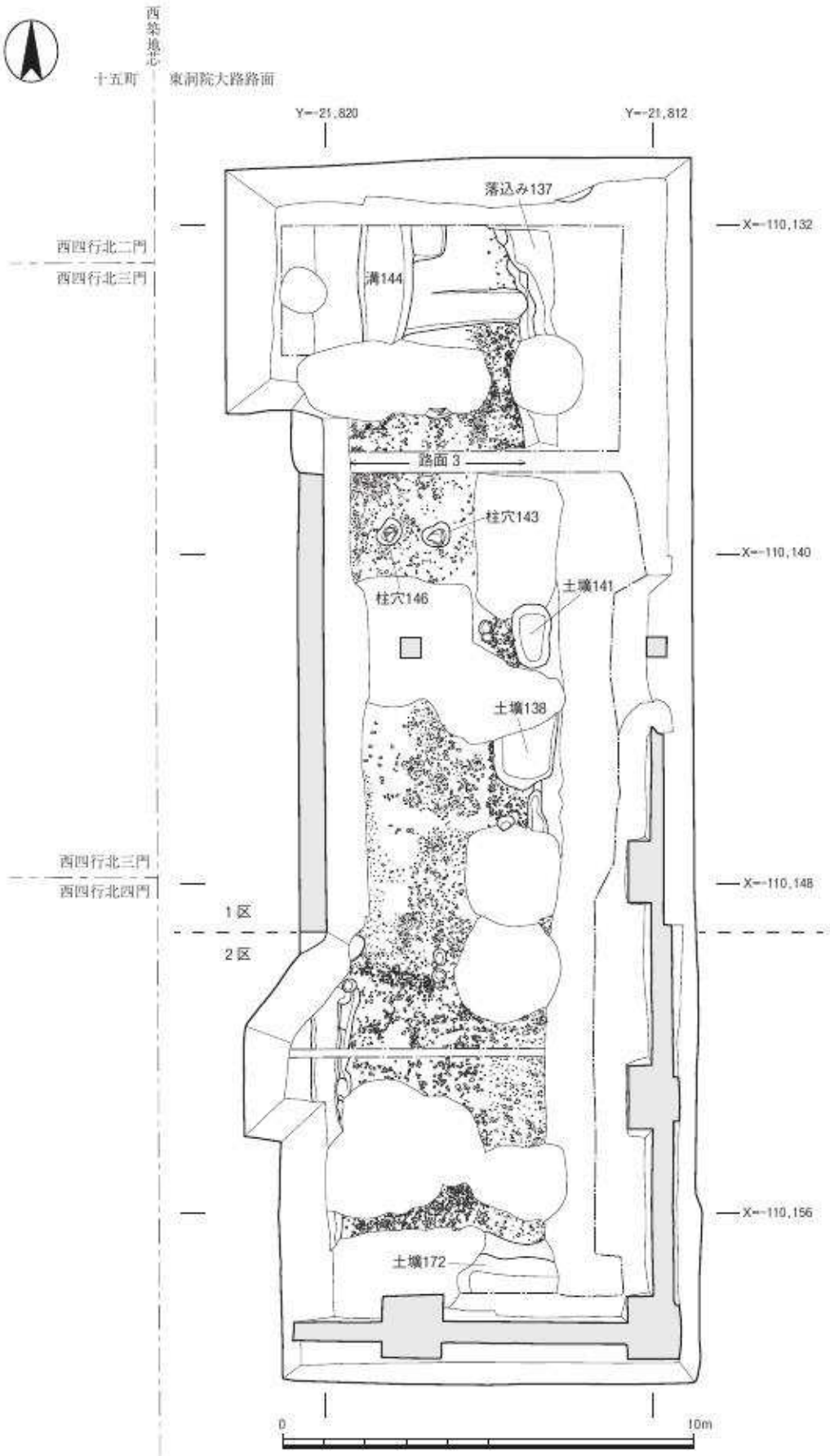
第2面遺構実測図（1/150）



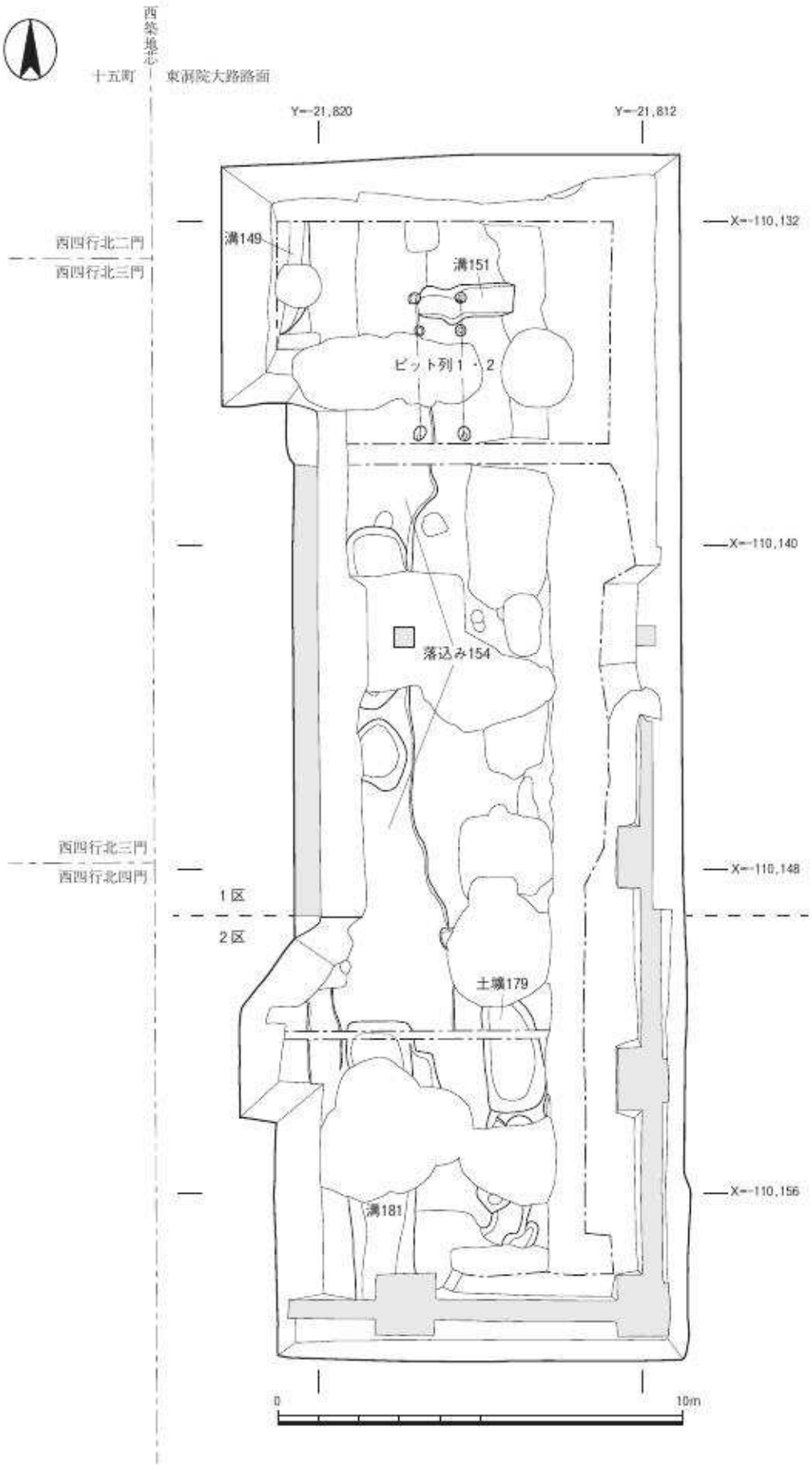
第3面遺構実測図（1/150）



第4面遺構実測図（1/150）



第 5 面遺構実測図（1/150）

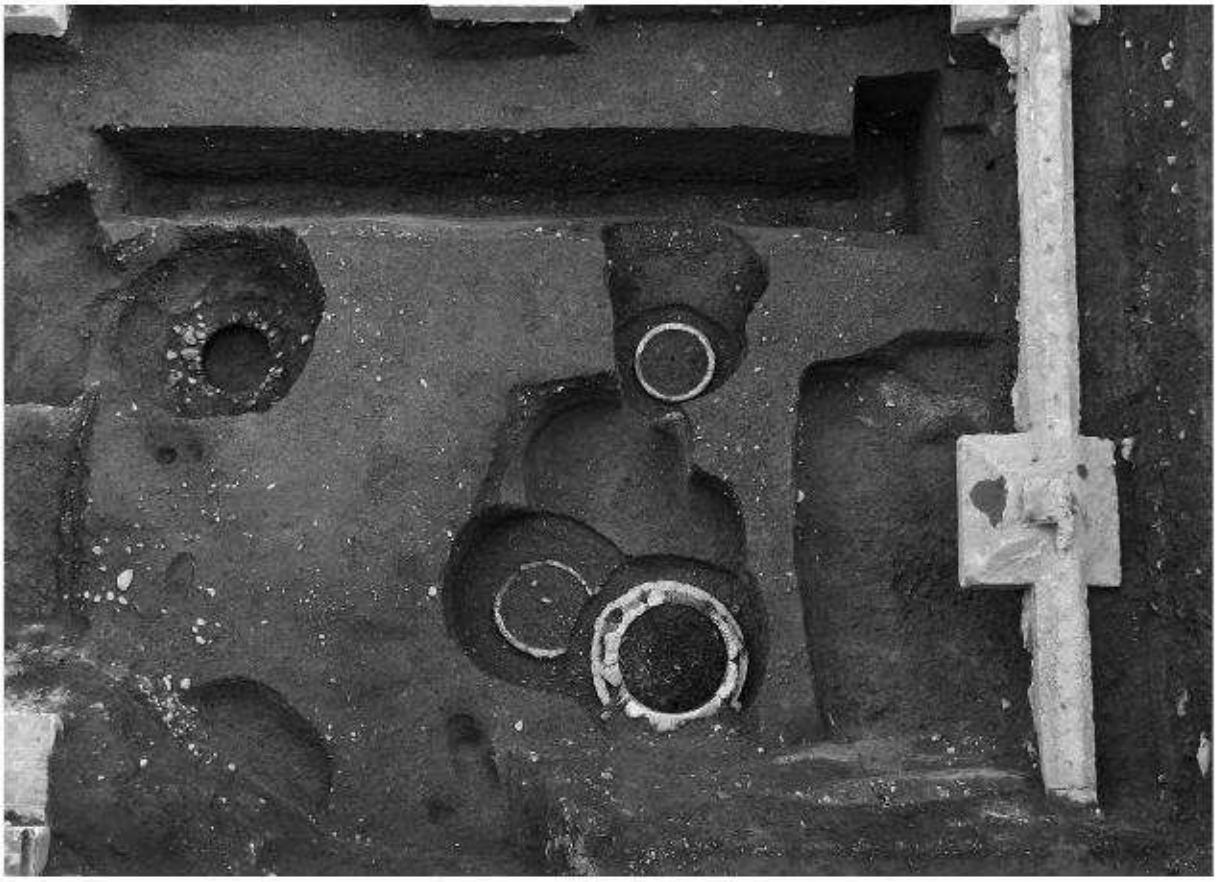


第6面遺構実測図（1/150）

1　1区第1面全景（西から）

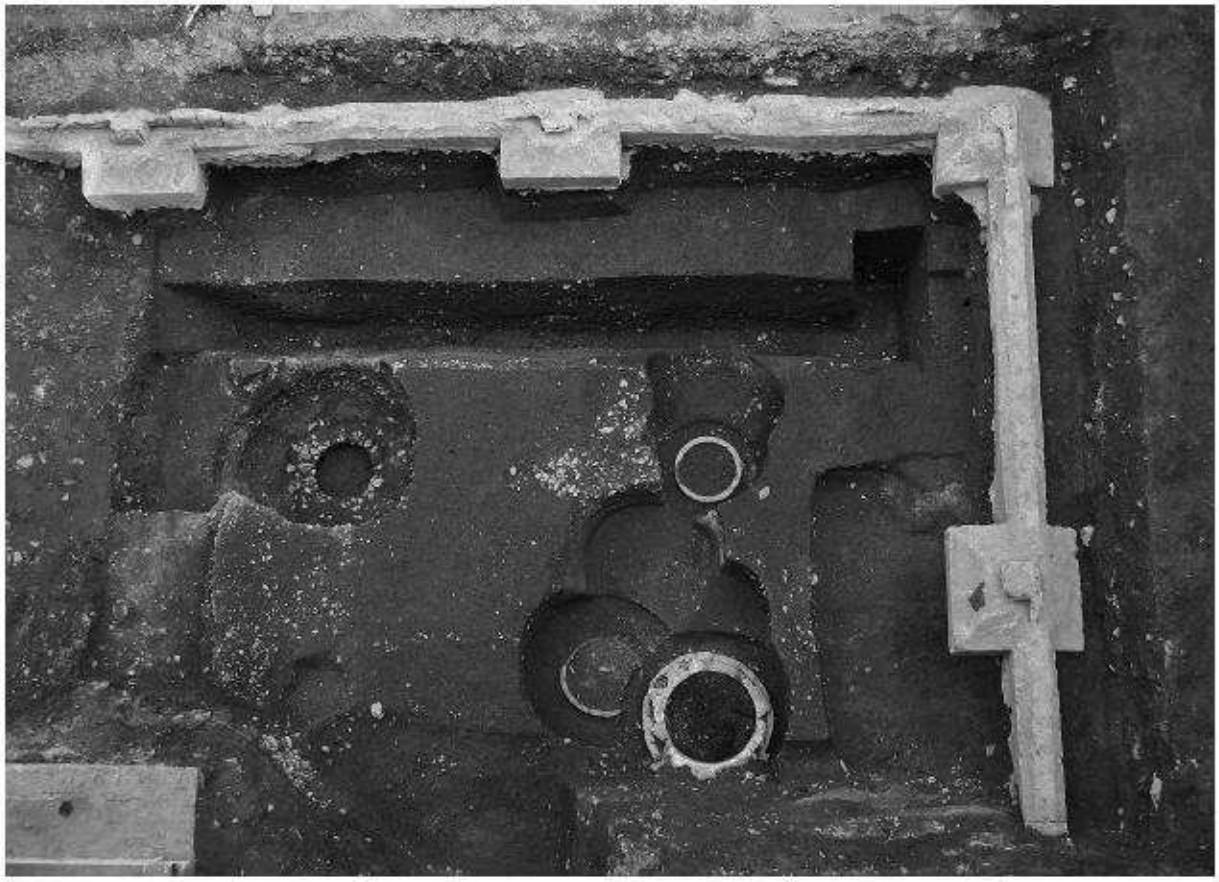
2　1区第2面全景（西から）

1　1区第3面全景（西から）



2　2区第3面全景（西から）

1　1区第4面全景（北から）



2　2区第4面全景（西から）

1　1区第5面全景（西から）

2　2区第5面全景（北から）

1　1区第6面全景（西から）

2　2区第6面全景（西から）

1　礎石建物１（西から）

2　井戸164（北から）

3　井戸80（北から）

4　石列４（西から）

1　溝130（北から）

2　溝130断面（路面セクション）（北から）

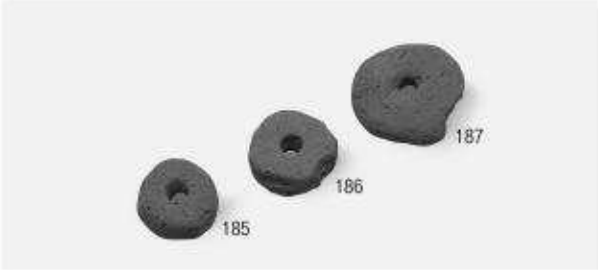
3　溝134（北から）

4　柱穴143・146（西から）

5　ピット列1・2（北から）

6　溝149（北から）

溝149・土壙179・溝181・第6面掘下げ・溝141・第4面掘下げ・第3面掘下げ出土遺物



第２面掘下げ・第１面掘下げ・土壙４・第３面掘下げ・土壙14・落込み107出土遺物

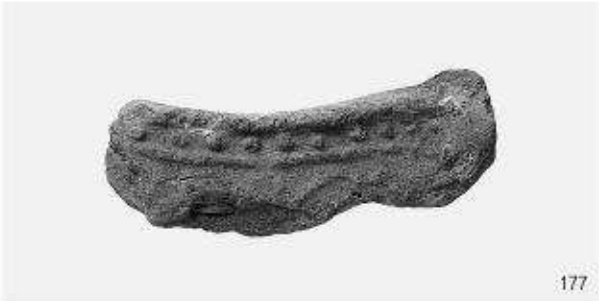
172

173

174

175

176


177

178

179

180

181

182

184

第３・４・５・６面掘下げ・東西セクション・溝130・141・181出土遺物

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

―御射山町の調査―

発行日　2015年3月31日

編集
発行　古代文化調査会

住　所　〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL　(078)857-6368

印　刷　真　陽　社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351-6034